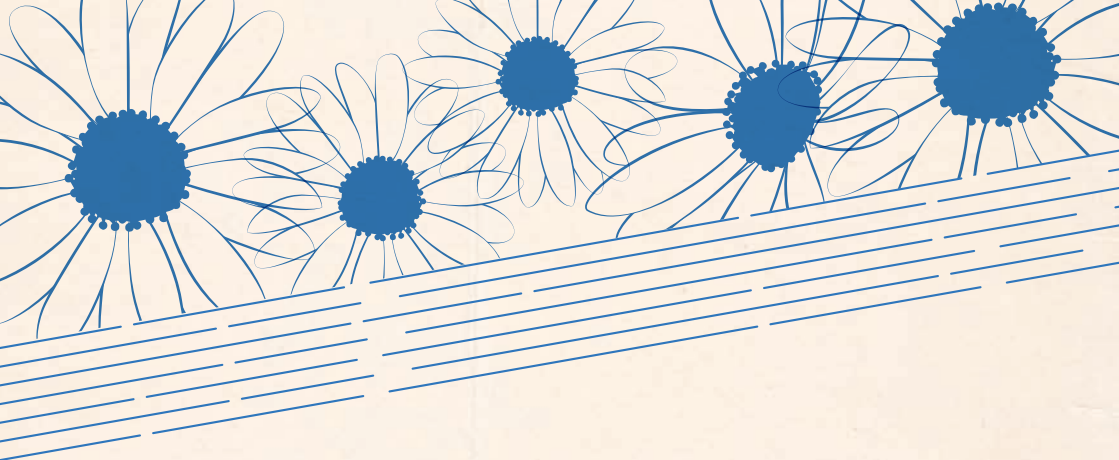
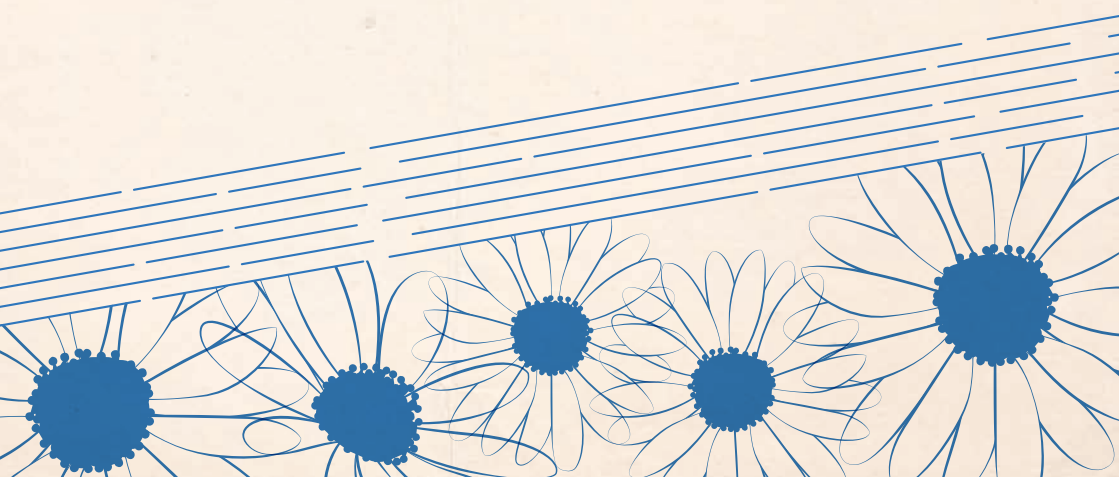




令和5年度
のじぎく文芸賞
2024 LITERARY WORKS

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会



発 刊 に あ た っ て

兵庫県では人権尊重の理念に関して県民の理解を深めることにより、人権の尊重が社会の文化として定着し、県民みんながお互いを認め合いながら共に生きる「共生社会」の実現を目指して、家庭や学校、地域、職場等における人権教育及び啓発・研究を進めてきました。

近年は少子・高齢化、国際化、情報化の急速な進展、人々の価値観や生き方の多様化など社会環境が著しく変化する中、人権課題もますます多岐にわたり、複雑化しています。インターネットによる人権侵害、職場や学校でのいじめ等の課題に加え、外国人や性的少数者の人権、さらに最近では、新型コロナウイルスの感染者やその家族、医療従事者等に対する誹謗中傷や差別的な扱いなど、様々な人権課題が新たに発生しています。

兵庫県と（公財）兵庫県人権啓発協会では、日常生活の中で人権の尊重が文化として定着している社会をめざして「人権文化をすすめる県民運動」を市町と共に展開しています。「のじぎく文芸賞」もその取り組みの一つであり、文芸作品の創作や鑑賞をとおして県民の皆さんに人権について主体的に考え、豊かな人権感覚を身につけていただくことを目的に公募事業を続けて参りました。三十回目を迎える本年度は、六一三編の作品が寄せられました。いずれも、人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られた力作ぞろい

で、平成六年の第一回公募以来、応募総数は二六、〇五五編となりました。ご応募いただいた作品の中で優秀なものについては、ひょうご人権ジャーナル「きずな」やラジオ番組での人権啓発に活用して参ります。作品づくりをとおして育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信され、人権文化の定着がいつそう図られることを期待しています。

本作品集には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞八編を収録いたしました。県民の皆さまにお読みいただくと共に、人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめさまざまな啓発事業などを実施し、県民のみなさまの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めてまいりたいと存じますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

令和五年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

令和五年度 人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

氏 名	作 品 名	部 門 (部)
-----	-------	---------

〈最優秀賞〉

中 田 あきこ	私は、大丈夫	小 説
---------	--------	-----

七 草 かまど	刻む	随 想
---------	----	-----

森 本 宝乃実	いのちの命	詩
---------	-------	---

原 口 来 瞳	二人が生きているということ	創作童話
---------	---------------	------

〈優秀賞〉

梶 本 千紗姫	あの雨の日に	小 説 (一般)
---------	--------	----------

大 西 莉 央	春にあかりは輝きだす	小 説 (学齢児童生徒)
---------	------------	--------------

コ ス モ ス	安心感を伝える存在に	随 想 (一般)
---------	------------	----------

白 川 遙 人	優しさで広がる世界	随 想 (学齢児童生徒)
---------	-----------	--------------

ひ の 朱 寝	ひかりのようなこえでした	詩 (一般)
---------	--------------	--------

北 口 緋 希	大切な人たち	詩 (学齢児童生徒)
---------	--------	------------

鯖 喰 太 郎	お母さんといっしょだから	創作童話 (一般)
---------	--------------	-----------

らいおん ねこ	優の挑戦	創作童話 (学齢児童生徒)
---------	------	---------------

〈佳作〉

阿部忠彦 高柳美緒 霜坂葉月 森内悠月 堀江倫太郎 塚口佳子 石塚花 吉田成美 阿江美穂 大浦由佳子 高野ひろこ 矢内海吏 井崎璃空

ありがとう

竜宮城をさがして

奇跡の音

たった一つの偶然

友人と私

この想い、尽きることなく

みんなで繋ぐ願い

「見えない」障害を「見つける」ために

母と兄

禅問答

ちいちゃんと子ねこ

小さなヘビのものがたり

おおかみとアパート

小説（一般）

小説（一般）

小説（一般）

小説（学齢児童生徒）

随想（一般）

随想（一般）

随想（学齢児童生徒）

随想（学齢児童生徒）

詩（一般）

詩（一般）

創作童話（一般）

創作童話（学齢児童生徒）

創作童話（学齢児童生徒）

目次

【総評】		審査委員長	勝沼直子	1
【部門別審査講評】		各審査委員		2
【最優秀賞・優秀賞作品】				
《最優秀賞》				
〈小説部門〉	私は、大丈夫		中田あきこ	19
〈随想部門〉	刻む		七草かまど	29
〈詩部門〉	いのちの命		森本宝乃実	34
〈創作童話部門〉	二人が生きるということ		原口来瞳	36

《優秀賞》

〈小説部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

あの雨の日に	梶本千紗姫
春にあかりは輝きだす	大西莉央

〈随想部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

安心感を伝える存在に	コスモス
優しさで広がる世界	白川遙人

〈詩部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

ひかりのようなこえでした	ひの朱寝
大切な人たち	北口緋希

〈創作童話部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

お母さんといっしょだから	鯖喰太郎
優の挑戦	らいおんねこ

◆令和五年度応募作品の内訳

合 計	学 齡 児 童 生 徒 （ 中 学 生 以 下 ）	一 般 （ 高 校 生 以 上 ）	部 門
			小 説
36	16	20	随 想
431	231	200	詩
121	68	53	創 作 童 話
25	13	12	応 募 総 数
613	328	285	

◆令和五年度審査委員

勝沼 直子（総括）
時里 二郎（詩）

尾崎 美紀（小説）
尾崎 美紀（創作童話）

三浦 暁子（随想）

総評

審査委員長 勝沼 直子

多様な生き方を認め合い、差別や偏見のない社会を実現する。このことに反対する人はいないでしょう。ところが現実の世の中では、性的少数者への差別をなくし理解し合おうとうたう法律が一部の反対で大事な言葉を削らざるを得なくなったり、少数民族らへの偏見に満ちた発言を繰り返す政治家がいたり、不条理な出来事がいろいろと起きています。

SNS（交流サイト）の世界では、共感の「いいね」の裏で、いわれのない誹謗中傷も飛び交っています。こうした動きや言葉のひとつひとつに、傷つく人がいることを私たちは十分想像できているでしょうか。見て見ぬふりをしていないでしょうか。

今年ののじぎく文芸賞は、自らの体験などに基づいて、出自や障がいなどに対する差別や偏見の現状に真正面から向き合った力作が集まりました。

特に随想部門の最優秀賞「刻む」は、当事者でなければ紡ぎ出せない鋭く深みのある言葉に心を揺さぶられました。目を背けず、多くの人に読んでもらいたい作品です。

生きづらさを抱えた友人や家族を支える側の視点に立った作品も目につきました。理解し支えたいと思っているのに、つい自分の都合や世間体を気にして周囲に流されそうになる。聖人君子でない人間なら当たり前の感情だと思いますが、それを正直に認めるのはとても難しいことです。

小説部門の最優秀賞「私は大丈夫」、創作童話部門の最優秀賞「二人が生きているということ」は、悩みながら心の中の壁を乗り越えていく過程が繊細に表現されていました。読む人は「自分ならどうする？」と考えさせられるでしょう。

ところで「多様性」とは何でしょう。互いの違いを認め合い、自分と違う価値観も尊重すること。突き詰めれば、誰の命も大切なのだと気づくことではないでしょうか。詩部門の最優秀賞「いのちの命」は心臓の鼓動が伝わってくるような命の賛歌です。どうぞ声に出して読んでみてください。

生きづらさに縮こまっていた心を、ほぐしてくれるような作品がそろいました。ここにお届けできることをうれしく思います。

部門別審査講評

【小説部門】

審査委員 尾崎 美紀

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

時代が混とんとしている中で、ただでさえ生きていくことは難しい。若者も年配者も今を生きるのに精一杯で、自分たちの将来やこの国の未来に思いを馳せることも、他人に心を寄せることも遠いことのように思えます。そんな中、無力とも思える書くことで自分の思いを伝え、相手の心を知るといふ事実があることを、今回の作品で知りました。完全な人間はいないけれど、それに近付くためにお互いが歩み寄ってささやかな幸せを見つけていく。作品を読み進めるうちに、ぎすぎすした世の中が、少し違って見えてきました。どの作品にも温かい血が流れていて、読んだ人をほっとさせるでしょう。今回はすぐれた作品が多く、選考に苦慮しましたが、原稿用紙の使い方、改行のタイピングやパソコンの打ち間違いなど、些細なミスが命取りになることがありますから、気を付けてください。

《最優秀賞》（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「私は、大丈夫」 中田 あきこ

主人公には自閉症スペクトラムの障害がある弟がいて、幼い頃から我慢をすることを強いられてきた。母親は弟につきつきりで、父親もあまり家族と話し合うことをしない。主人公もできるなら弟のことは隠しておきたいのだが、いじめられる弟を気遣って一步を踏み出す。それは気の重い決断だっただろう。しかも、弟のために自分の夢もあきらめようとする。家族が主人公の優しさに甘

えていたことを反省し、「誰か一人が我慢し続けることのないようにしよう」という父親の言葉で、主人公の未来がゆっくりと開けていく。最後に主人公が自分に言い聞かせるように「私は、大丈夫」とつぶやくセリフが秀逸だ。社会から疎外されていると思っていたが、実は自分の心の問題でもあると知る主人公の強さに感銘した。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「あの雨の日に」 梶本 千紗姫

ある雨の日に遭遇した事柄が、主人公の将来を決める指針になることに発展していく物語。視覚障害者を手助けしたことで、自分自身のことだけでなく社会を照らす小さな灯になることを考える主人公。文芸部で小説を書く主人公の視点も、目の不自由なお爺さんとの出会いと並行して、少しずつ変わっていくのに気付く。社会福祉にも興味を始めた主人公は自身の本心よりも周りの目を優先する人間、と自身を定義するが、実は誰以上に繊細な心の持ち主ではあるまいか。知らないことに気づくことが第一歩と教えられ、やっと小説を完成させる。文章も構成もうまく、漠然とした将来への不安と希望がないまぜになって葛藤する青春的一幕をうまく描いている。

〈優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「春にあかりは輝きだす」 大西 莉央

まずタイトルがいい。中学生になった主人公・楓の期待と不安、そしてまわりの友人との繋がりがテーマだ。同じクラスのあかりがなかなか打ち解けてくれないことが気になっている。楓は誰とでもすぐに仲良くなれる性格なので、彼女のことが理解できないでいる。声をかけるのはおせっかいかな？ と思いつつも気になって仕方がないのだ。時間はかかったが、お互い呼び捨てにし合え

る仲になった時、だれでも独りでいいはずがないと楓は確信する。友だちを作ることは、成人してからでもなかなか難しい。様々な行き違いがあったり、無理をしなくてはいけなかったり。しかし、そうやって試行錯誤の末に本当の友だちに遭えるのだろうか。中学生らしい心の動きが良く描けている。

〈佳作〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「ありがとう」 阿部 忠彦

中二の莉子は宿題に「私は誰？」という題の宿題を前に苦闘する。「客観的に自分を見つめる」ことの難しさ。不登校になってしまった詩乃を気に掛けながらも、何もできずにいる莉子に、両親が「それなら友人のことを書いてみてはどうか」とアドバイスする。詩乃はコロナで祖父母がなくなったのは自分がうつしたせいだと思っているらしい。「究極の自分探しは人の死と向き合うこと」という言葉で、青春の悩みにしか目が行ってなかった自分を俯瞰しながら苦しむ友人に寄り添おうと考えていく。「情熱ソーラン」という行事を機に、練習のできない詩乃の部屋の前で踊る莉子たち。それはやがてクラス中に広まって、窓ガラス越しに詩乃の気持ちを動かしていく。青春真っただ中の作品。両親との会話の部分が少し長く説明的になってしまったが、読み易く解り易い文章だ。

作品名「竜宮城を探して」 高柳 美緒

自閉症スペクトラムという障害のある息子と、その姉との日常を描きながら、母親としての葛藤に悩む主人公は、見えない息子の未来に不安を隠せない。自分自身の心がほころびていく中で、コロナ禍でのマスク着用が不要になってもそのことが納得できない息子。難しいことは出来るのに、簡単なことができない。葛藤する家族は、善意の先生たちに対しても、感謝の気持ちとは裏腹に、

心がずさんでいく自分を持て余す母の心情表現が秀逸だ。

息子にだけマスク着用を指示され、息子が黴菌のように扱われていると心が痛む母は、マスクという存在が、息子を社会と遮断するパーテーションのように思えるのだ。現世に一人取り残された浦島太郎に例えて、世界と切り離されるのではなく、誰もが受け入れられるような竜宮城を探し続ける主人公が愛おしい。

作品名「奇跡の音」 霜坂 葉月

高校の吹奏楽部のコンクール挑戦の苦闘を描いた作品。幼少からトロンボーンを習う冬樹と孝一は、仲のいい先輩後輩だが、なかなか上達しない孝一に冬樹がアドバイスしたことで孝一は遅れを取り戻す。憧れの先輩として皆から慕われる冬樹も、緊張しがちな性格故に自分に自信がない。審査員に音に自信がないと指摘され焦る孝一は部員の彩乃に相談する。彩乃は人の評価は「寿司に付いてくる茶わん蒸し」程度のもつと言ひ、自身の出す評価こそ一番頼りになる、と言う。不安から投げやりになるが、孝一から誰かに褒められたことで自信がつくからと、先輩に自信のお裾分けをする。茶碗蒸しとお裾分け。味のある思いやりが効果的だった。『奇跡の音』を見事演奏し県大会出場を勝ち取る青春ドラマだ。

作品名「たった一つの偶然」 森内 悠月

いじめが常態化している今、いじめられる側にとつての最終決断が「死」であるというのは余りに悲惨で心が痛い。死を覚悟した主人公が、偶然知り合った女性に「もっと広い世界を見た方がいい」と諭され、心の奥をつき詰めていく物語だ。「もっと広い世界」とは？ 彼女と行動を共にするうちに、知らなかった世界に触れ、生きることにより再び意味を見出して行くが、卒業と共に彼女とも

別れる日が来る。暖かい感情を思い出し、生きることが楽しいと思えるようになったことで、主人公は既に過去の自分の殻から抜け出しているのだろう。

人と人との奇跡のような出会いが誰のところにもやって来ることを願ってやまない。少し理屈っぽいところがあるが、嘘と真実の際どい間をうまく表現している。

【随想部門】

審査委員 三浦 暁子

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

令和五年度「のじぎく文芸賞」の随想部門には四三二作品の応募がありました。そのうち、一般の部が二三一篇、学齢児童生徒の部が二〇〇篇でした。毎年、作品をお寄せいただく方もいれば、まだ文章を書き始めたばかりの生徒さんもあります。当然、内容もそれぞれですが、いずれの作品にも文章を書くことへの真剣さがあふれており、選者としての喜びを感じます。年ごとに深みを増していく作品に触れたり、初らしい表現にはつとさせられました。取り上げられる題材も、コロナ禍やいじめの問題、そしてLGBTやSNSにまつわる悩みなど多種多様でしたが、どの作品にも、生きにくいこの世をなんとかして克服しようとする気概に満ちあふれています。

最近の本を読まない人が増えていると言われます。けれども、文章を書く人はむしろ増えているのではないのでしょうか。書くことによって、周囲へのまなざしを研ぎ澄まし、自分と他人の理解を深めていきたいものです。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「刻む」 七草 かまど

被差別部落出身の作者が打ち明けるエピソードは、体験した者だけが持つ迫力に満ちています。学校とは別に解放学級という学びの場があることをラッキーだと思っていたという言葉は、現実とその場で勉強した人にしか書くことのできない感想でしょう。作者の子ども時代は周囲の大人に守られ、安定した幸福なものだったようです。

ところが、結婚するにあたって、最初の壁にぶつかります。婚家先で出身が問題視されていると

知ったのです。当事者でありながら、そんなことは過去のことだと信じていた彼女にいきなりつきつけられた現実。しかし、故郷への愛着が作者を救います。自らの出身地に目をそむけず、勉強することによって、自分自身を変えていこうとするのです。

故郷への思いは人それぞれです。どんな方法で理解していくかを決めるのは、自分自身に他ならないと教えていただいたような気持ちです。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「安心感を伝える存在に」 コスモス

話しを始めるにあたり、言葉が詰まってしまう「きつ音」に悩む主人公。それは周囲が想像する以上の生きづらさとなって主人公を苦しめてきました。その悩みは人間関係を浸食し、友達もできにくく、小学校、中学校、高校は暗い日々を送らなければなりません。長きにわたる苦しみを思うと、涙が出そうになります。

ところが、大学に入学したとき、転機が訪れます。アニメのキャラクターのような声を持つ友人ができたのです。彼女の誘いでコーラス部に入り、舞台に立つて歌うことができるようになります。そして、訪れた奇跡というべき体験……。「あ」という詰まりやすい言葉から始まるアーモンドトーストとアイスコーヒーを無事、注文することができたのです。主人公にとって、それは何かを乗り越えた証となりました。とは言え、生きづらさは相変わらず続きます。それでも、ひとつひとつを自ら克服していこうとする姿に拍手を送りたいと思います。

〈優秀賞〉（学齡兒童生徒の部）

作品名「優しさで広がる世界」

白川 遙人

左手足に麻痺が残るお母さまを助けながら成長してきた主人公。毎日のことなので全部は書き出せないほど色々なことがあると告白しながらも、母への視線は優しく愛に満ちています。それはおそらく、父や妹と共に助け合うため、心に余裕があるからでしょう。家族の団結は力となります。何よりも自分を育ててくれた母への感謝が満ちていることに打たれます。

さらには母の生き方も見事だとしか言いようがありません。不自由な体で家事や子育てをしているというのに、愚痴もこぼさず、在宅で仕事をこなしているといいます。その姿には尊敬の念を抱かずにはいられません。子どもの頃は体が不自由なためスポーツが嫌いだったと伝えつつも、今は息子が楽しそうにするから好きになったと言いつけるまぶしいまでの明るさがあります。優しさがさらなる優しさを生むことを教わったような気がします。

〈佳作〉（一般の部と学齡兒童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「友人と私」

堀江 倫太郎

中学にほとんど行かないまま高校に入学した作者にとって、高校生活も順調とはいえないすべり出しでした。けれども、三年生になったときに参加した校外学習がきっかけで、自分を変えることができました。その喜びを素直に書く作者に「本当に良かったですね。頑張りましたね」と、言いたくなります。

友人が欲しいと思いつながらできないで悩んでいる人にとって、この『友人と私』は勇気を与えてくれます。そして、ひとりぼっちでいると思いつ悩んでいたときも、実は自分でも気づかないまま誰かに支えられ、そして誰かを支えていたことに気づくのではないのでしょうか。

作品名「この想い、つきることなく」 塚口 佳子

作者はアルツハイマー病の夫を17年間も介護してきました。大変なご苦勞だったに違いないのに、夫を語る言葉は愛に満ちています。これまでも夫の様子を細やかに表現し、たくさんの作品を私たちに届けてくれました。文章力も確かで、読み応えのある作品は、アルツハイマー病の家族を抱えたことがある私にとっても大きな励ましとなりました。

ところが、とうとう夫との別れが来しました。コロナ禍で会えない日々が続き、ようやく週に一度面会が許されたというのに、夫は逝ってしまったのです。あまりにも突然な別れに呆然とする作者を支えたのが、かつて教師をしていた夫の教え子や同僚、そして入所していた施設の方々の思いやりでした。82歳の作者が夫に想いを巡らせ、「大好きな人だったんですよ」と振り返る様子に胸を打たれ、しばらく原稿用紙から顔を上げられなくなりました。

作品名「みんなで繋ぐ願い」 石塚 花

「えだまめ祭り」という愉快な催しから筆を起こし、そこで活躍する「がっち」というニツクネームを持つ魅力的な人物との出会いがなめらかな筆致で書かれています。出だしから読み手の心をつかむ力量に驚かされました。活気溢れる「がっち」ですが、実は事故のため右手の神経の機能を失っていることに作者は気づきます。それでも、困難に負けない姿を見て、自分は空間デザイナーになり、「がっち」のように体の一部が不自由でも安全に快適に過ごせる場所を創りたいと願うようになります。たくさんの思いをちりばめながら、自分の将来を思い描く物語に引き込まれました。

作品名「見えない」障害を「見つける」ために」 吉田 成美

かつて岡山にある障害者学校の寮で悲劇が起こったといいます。真夜中に火災が発生したので、その寮は二階建てで、一階に視覚障害者が、二階に聴覚障害者が暮らしていました。火災が発生したとき、一階の学生達は先生に助けられながら無事に避難することができたのですが、二階にいた聴覚障害者の学生はぐっすり眠っていたため、助かりませんでした。亡くなった人はすべて聴覚障害の学生でした。火事を知らせるサイレンに気づかなかったためです。

作者はこの事件を通して、一見しただけではわからない「見えない」障害者に思いを馳せます。そして、彼らを助けるためには何をすべきか本気で考えようとするのです。こうした自分で考える心が、大切なのだと思います。

【詩部門】

審査委員 時里 二郎

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

「のじぎく文芸賞」は、人権文化の進展と人権意識の解決に寄与すること——というはつきりとしたテーマがあります。その詩を読むことによって、心が動かされ、いのちや、身のまわりの人たちや、さらに社会のなかで生きるうえでの大切なことを見直すきっかけになるような作品を選びました。それから、「言葉」が生き生きと息づいている詩を選びました。

この審査でいつも言うように、頭の中で考えたことよりも、日常生活のなかで体験したことや、身の回りの人たちとの交流を見つめた作品には、おのずと読む人の心を動かす力があるように思います。今回入選した作品の多くも、実際の体験や日常の暮らしを見つめるところから紡がれた思考や感慨や思いがしっかりと表現されていました。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「いのちの命」 森本 宝乃実

「いのちの命 いのちの命」や「ドクンドクン 生きている」の繰り返し、力強いリズムを作り、それにのせて「いのちにも命がある」とか「他人が奪うことは出来ない」など、命の大切さを歌い、さらに途中から転調して、悲しい時、辛い時——嬉しい時、楽しい時の「深呼吸」をはさんで、命の輝きを歌い上げるといふ詩の構成もよく考えられています。

声に出して読んでも、力強いリズム感に支えられた明るい歌になっているところもいいと思います。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「ひかりのようなこえでした」 ひの 朱寢

テレビで報じられていたある自死のニュースをきっかけに、作者は「人の死」に向き合う。自分が気づけない多くの人が自ら命を絶っていることを思い、それを救うことができない自分の無力さを思い知ります。

そんな時、バス停で隣にいた人から「良い天気だねえ」と声をかけられる。作者は、それを「ひかりのようなこえ」という印象的な言葉を使って、その声に受けた大切な啓示を書き、つけます。「人に寄り添い、照らし。あたためる『ことば』を人は持っている」と。

無力さを言うまえに、このバス停の隣の人のように、ことばをかけることで、周りにいる人の心に寄り添うことができるのではないかと気づくのです。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部作品より）

作品名「大切な人たち」 北口 緋希

発表の時にしてしまった失敗がトラウマになって、自信を失い、悩み、落ち込んでいた作者が、気持ちをきりかえて前向きな心に変わったのは、自分の周りの友達や先生の励ましのおかげだったと気づきます。わたしを応援してくれる人、見守ってくれる人に気づいたことがきっかけだったのです。

人の優しさや思いやりに触れ、支え合うことの大切さ、すばらしさに気づくことで、さらに司会や代表あいさつまでできるようになりました。そしてこんどは励ますほうに、見守るほうに、応援するほうに——という心の変化も大切な変化です。

〈佳作〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「母と兄」

阿江 美穂

「家」の問題は、この作品のように、戦前の家父長制の名残が尾をひいている地域では今もなお家族を苦しめています。母も兄もともにお互いを大切な存在として生きているにもかかわらず、親子の情愛を歪ませてしまう。当然、封建的な家制度は、それぞれの人權を大きく阻害するものとして許すことはできませんが、家制度を否定しながら「家から逃げた／母を妹たちに押しつけた」と自分を責める兄のなかにも、家父長制度的な残滓を残しています。そうした問題の根深さを考えさせる作品です。作品のなかでは、親子の間はもやもやとして解決していませんが、家制度の現在をあらためて問い直す問題作であると思います。

作品名「禪問答」

大浦 由佳子

九十三歳の母の「なんでこんなに／長く生きているんだろう」という、感慨ともため息ともとれることばに、作者は生きること、命の不思議さについて考えます。人それぞれに命の長短あるのはなぜか、生きるしんどさを訴える母と、生命力にあふれ、ひたすら命を燃やし続ける自然の生き物たちとを重ねて、生きることについて考えています。その答えを安易に出そうとするのではなく、長寿を生きる母の在りようを見つめていこうとする作者の姿勢こそ命を見つめる真摯な態度なのではないかと思います。

【創作童話部門】

審査委員 尾崎 美紀

《審査総評》（一般の部と学齡兒童生徒の部を含めて）

今年はユニークな作品が多く寄せられました。とりわけ学齡兒童の作品にバラエティに富んだ作品が見られました。童話と一般の創作はどう違うのか、とよく質問されますが、基本的にはテーマの選び方に違いはありません。昔話はともかく、現代の童話には時代を反映した、小説と差のない題材が見られます。ただ、一つ違う点はと言うと、その作品が子供に理解できるかどうか、その１点だけです。子供が読んで、未消化にならないか、未来を壊さないか、それさえ心に留めておけば何を選んでもいいのです。しかし、子供だからと言って手を抜くと、子どもはすぐに気がつきます。むしろ大人よりも、子どもの方が敏感です。子供に教えてやるんだと言った風な作品には、子どもはそっぽを向くでしょう。書き手がしっかりと子供と向き合った作品を書いてください。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齡兒童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「二人が生きているということ」 原口 来瞳

病気のせいで食事もチューブから、上手く話せず歩くこともできない妹の望美のことで、姉の夏希はいつもいら立っている。母親は妹につきつきりで、最近では名前さえ呼んでももらえない毎日。何でも押し付けられる不満が日々増していく夏希は、祖母とこころへ駆け込み、そこで妹が生まれた日のことを聞かされる。長く生きられないかもしれないと言われた時の家族の落胆。それでもきつとこの子には生きる力があると信じる母親が、つけた名前は姉妹二人を合わせると「希望」になることを知る。授業参観の日、妹を連れてきてほしいとメモを残して登校する夏希。名前の由来を作文にして読む夏希は、疎外されていたという悩みを乗り越えて、自分の存在を確認する。家族ゆえに

誤解があったり本心を打ち明けられなかったりすることは多い。葛藤する姉の心理がよく書けている。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「お母さんといっしょだから」

鯖 喰太郎

捨て猫のマイは、雨の中で弱っていく母親猫のために食べ物を探しに行くが迷子になってしまう。助けてくれたおばさんに飼われることになったマイ。幸せに暮らすなかでも、母親のことが心配で家を飛び出してしまふ。母猫はすでに死んでいたのだが、その死を理解できないマイ。もう母親に会えないことは解っているのだが、段ボール箱の中の母が忘れられない。「お母さんは心の中にいる、マイの半分はお母さんなんだ」というおじさんの言葉で、自分が幸せなら母親も幸せなんだと理解する。母親はいつも自分と一緒にいるんだと納得して、喪失感から立ち直っていく。小品だが、破綻なく構成されている。母子が捨てられる前にどういう暮らしをしていたかを補足して作品に深みを出すとともに良くなる。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部作品より）

作品名「優の挑戦」

らいおん ねこ

生まれつき足が不自由な優は、その事実を受け入れられなくて引きこもりがちになってしまふ。しかし、母に連れ出された公園で声をかけてきた心美と打ち解け、登校する決心がつく。自分にできる事はないと思っていた優だが、心美の誘いでボランティアに参加することになり、図書館改装の手伝いをする中で徐々に自信を取り戻していく。出来ることを全力で成し遂げた後の爽快感と、誰かの役に立ったことの嬉しさは、これまでも何もしないで殻に閉じこもっていた自分を解き放つ

きつかけになった。支えになってくれた友だちの存在が大きかったことはもちろんだが、まず第一歩を踏み出す勇気を持つ大切さを問いかける作品だ。

〈佳作〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「ちいちゃんと子ねこ」 高野 ひろこ

恥ずかしがり屋のちいちゃんは、話しかけられても声が出せないため学校でもいつも一人だった。ある時、道ばたで弱った黒猫を見つけ、その子猫を連れ帰る。息も絶え絶えの子猫はちいちゃんが世話することになった。すっかり明るくなったちいちゃんは、学校でみんなと子猫の話をすることになる。「尾曲がりネコ」は幸運を運んでくるというが、命を救われた幸運な子猫が、ちいちゃんにも幸運を運んできたという事だろう。命の重みと子猫が取り持つ友だちの輪が微笑ましい。ただ可愛い動物との触れ合いだけでなく、子猫に関わる出来事をちいちゃんがきちんと解決したというようなエピソードがあれば、さらにちいちゃんの自信にもつながるし、作品にも深みが出ると思う。少しさらりと書きすぎたような気もするが、一度は経験する小さな命との出会いをうまく書いている。

作品名「小さなヘビのものがたり」 矢内 海吏

臆病者の小さなヘビは、意地悪ムカデにいじめられ、「ぼくにいいところはないの？」と母さんヘビに問う。小さなヘビはそれを探しに行くことに。途中で会った女の子が、病気の母親のために虹色のれんげを探しに行く途中で、父親とはぐれたことを聞く。ヘビがれんげの在処を教えると、「あなたは優しいヘビだ。それがあなたのいいところ」と言う。その言葉に自信を持ったヘビは、大好きなお母さんのためにれんげを摘む。再会した父親が、あの意地悪ムカデを踏みつぶそうとした時、

「ムカデにも家族がいる」と小さなヘビと女の子が止める。家族思いのヘビのやさしさに触れたムカデも、改心して友だちになるというお話。自分のいいところを見つける小さな旅で、ありのままの自分に自信を持つことができたという、絵本の題材になりそうな小品だ。

作品名「おおかみとアパート」 井崎 璃空

一人暮らしをするオオカミが「入居者募集 月に一度のパーティ付」のチラシを見て、どうしても入居したいと訪ねるのだが、オオカミを見た住人たちに悪者扱いにされてしまう。諦めかけた時、ライオンに襲われたリスに助けを求められ、勇気を絞ってその石頭で追い払うことに成功する。オオカミが本当は怖くないと知ったアパートの管理人は、オオカミにぜひ住んでほしいと頼む。見えてくれや噂で判断してしまうのは、人間世界でも同じだが、本当の姿を知ることが大事だという教訓。お話自体は単純だが、SNSなどで他人を勝手な判断で傷つけてしまう昨今の戒めでもある。

最
優
秀
賞

《最優秀賞》

小説部門

私は、大丈夫

中田 あきこ

三つ年下の翔太は、一歳になっても二歳になってもしゃべらなかった。

私は、弟ができたときから「早く遊びたいな」と思っていたけれど、翔太はあんまり目を合わせてはくれないし、同じものをくるくるして遊んでいるだけで、私とはあまり遊んでくれないかった。

私が幼稚園に行くようになって、みいちゃんというお友だちができた。みいちゃんには翔太と同じ年の妹がいて、お迎えのときに歩くし、「ママ、抱っこ」とお話もしていた。

「お母さん、翔太はいつお話できるの？」
ある日聞いた。するとお母さんは「いつだろうね」と、悲しそうな顔で言ったから、それ以上は何も聞かなかった。

お父さんもあまり翔太を見ないようにしていたので、お父さんにも聞けなかった。

お母さんとお父さんは夜よくケンカしていた。翔太が早く話すとケンカが減るかもと思つて、翔太に字を書いてみせたりしたけど、翔太は興味ないようだった。でも絵をかくのは好きみたいで、同じような絵ばかりだったけどいつも描いていた。だから私も翔太に字を覚えさせるのはやめて、隣でよく一緒に絵を描いていた。

私が預かり保育で幼稚園に残っている間に、お母さんと翔太は幼稚園ではないどこかに通っていたようで、少しずつ翔太はしゃべられる言葉が多くなったり、歩くようになってきた。同じところをぐるぐる回ったりすることもまだあったし、何かを読んでいるよ

うなちよつと変なしゃべり方だったけど。

お母さんが預かり保育のお迎えで、遅くなることもあった。

「遅れてごめんね」

お母さんは言ってくれたけど、お母さんも大変だったんだろうと思って「ううん、大丈夫」と言っていた。

翔太が小学一年生になったとき、行き帰りはお母さんが一緒にについてきていた。用事などで翔太と一緒に登校できないときは「優菜、翔太と一緒に行ってあげてくれる?」と言われたので「うん、いいよ」と一緒に行くことにした。

登下校は隣のマンションのさっちゃんと一緒にいて、最初は翔太とさっちゃんと私と三人で行っていた。でも、翔太は気になるものを見つけると急に走り出したり、さっちゃんが話しかけても全然返事しなかったりしたので、「翔太くんがいるときは、私は別で行く」と言われてしまった。翔太はにこにこ

していることが多くて、一緒にいるのは楽しかったけど、さっちゃんと一緒に行けないのは少し寂しかった。

翔太が二年生ころから、お母さんと翔太が家で約束をして少しずつ小学校の登下校を一人でするようになった。最初のころはお母さんがこっそりついてきたり、私もちゃんと横断歩道を渡れるか見たりしたけど、お母さんとの約束をきちんと守れているようで、一人で登下校できるようになった。

ある日事件が起こった。私は五年生で、翔太の方が早く帰る日がほとんどだったけど、私と同じ時間に帰ることもあった。帰る途中、翔太がいた。翔太の前には六年生の男子ふたり。翔太は頭しか見えなかったけど、六年生にからかわれて怒っているようだった。

「何うーうー言ってるんだよ」

「また物を投げるのか?」

翔太は支援級に通っていて、普段は楽しく

勉強とかをしていたみたいだけど、思い通りにいかないことがあるとバニックや癇癪を起しているらしい。それを見たのかもしれない。もしくは、翔太は人との距離感がわからないことがあり、一方的に話しかけることもあるので、翔太から話しかけることになったのかもしれない。理由はわからないけれど、男の子たちは翔太が先に進めないように進路をふさいで、翔太の様子をおもしろがっていた。

私はお姉ちゃんなんだから、翔太を助けてあげないと。

そう思った。思ったけど、年上の男の子たちは私よりも背が高くて大きい。この二人の前に立つなんて怖かった。でもこのままにしておくと翔太がかわいそうだ。それに翔太がからかわれているのを見過ごして帰ったなんて、お母さんが知ったら悲しむだろうな。いろんな思いがぐるぐるまわった。男の子たちにこづかれた翔太が六年生の男の子たちに掴

みかろうとしたとき、私はやっと足を前に出すことができた。

「やめてください！」

男の子たちは驚いて私を見た。

「し、翔太が嫌がつているじゃないですか」

「は？お前なんだよ」

「翔太の姉です」

「お前も怒るとうーうー言うの？」

なおも笑いあう男の子たち。

私は無言で翔太の手を引き、男の子たちを見ずに歩き出した。翔太は嫌がったけれど、まだ私の方が力があつたから、無理やり引張って連れて帰った。男の子たちが追いかけてきたらどうしようかとドキドキしたけれど、ついてくる様子はなかった。

すぐに違うところへ行きそうになる翔太をなんとか家まで連れて帰ってくると、どっと疲れが来た。家にはちょうどパートから帰ったお母さんがいて、私と癇癪を起こす翔太の様子を見てすぐに「どうしたの？！」と聞いて

てきた。

私は六年生の男の子たちが翔太をからかっていたことを伝え、うまく翔太を助けてあげられなかったことを謝った。話している途中になんだか涙が出てきて、袖で拭こうとしたけれど、涙は止まらなかった。すると急に体が腕に包まれた。お母さんが私を抱きしめていた。いつも翔太を追いかけて、翔太の世話をしていたお母さん。抱きしめられたのは、いつぶりかわからないくらいだった。

「ごめんね優菜、翔太を守ってくれてありがとうね」

お母さんも涙が出そうになっていた。その後ろでは、翔太がわめきながら暴れていた。私はお母さんを見た。

「私は大丈夫。それより翔太を落ち着かせよ」

お母さんは申し訳ないような顔をし、私から離れ、翔太のところに行った。だいたい落ち着く時間が多くなってきていた翔太だったけ

れど、気持ちの切り替えが苦手なのもあり、この日はなかなか落ち着かずずっと叫んでいた。

お母さんが翔太につきつきりしているときは夕飯の準備ができないので、私がお米を炊いた。「レトルトカレーでいいよ」と言ったので、ゆで卵をつくって、レトルトカレーを温めて夕食に出した。そのころにやっと翔太は落ち着いた。翔太は好き嫌いが激しくて、食べられないものも多かったけれど、カレーは好きだったので素直に食べてくれた。

次の日、私が一緒に学校に行かないといけないかな、と思っていたけれど、お父さんがついてきてくれた。お父さんが翔太と付き添って小学校に行くのは初めてだったので、すぐぐびつくりました。

翔太がもっと小さかったころは、抱っこもしなかったし、あまり話しかけたりもしなかったお父さん。でも、最近少しずつ翔太とかかわろうとしている姿を見ることはあつ

た。それに最近はお父さんとお母さんのケンカする声も減ってきていたので、両親でいろいろと話し合ったのかもしれない、と思った。

翔太が無事小学校に着くか、さっちゃんと一緒に翔太とお父さんの後ろを歩いて学校に行ったけれど、特にいつもと変わらなかった。

次の日の夕方、私はお留守番で、翔太とお母さんは小学校に行った。「あの子たちもその親も謝ってくれたから、もう大丈夫よ」帰ってきたお母さんは言った。お母さんの言ったとおり、あの男の子たちが翔太をからかうことはなくなった。

でも反対に、翔太がほかの子に迷惑をかけて、お母さんやお父さんと一緒に謝ることもあった。たまに同級生から「優菜の弟、また暴れたらしいね」と聞かされることがあって、いやな気分になることもあった。

私が中学生になると、違う小学校からの子たちも多く、私に翔太という弟がいると知っ

ている人も少なくなった。それは私が言わなかったからだ。かわいいところもあったけれど、あまり周りに弟がいることは知ってほしくなかった。同じ小学校出身の子たちもいたから、「きょうだいいるの？」と聞かれたら「うん」とは言ったけれど、あまり話は続かせないようにした。そんなときは、心がちくつとした。

高校へ進学するときは、自宅から通える範囲で一番遠くの高校を希望した。このころには、翔太は自閉症スペクトラム症と注意欠如・多動症というのはわかっていた。家では何かするときは手順を説明する、基本的にほめるなどルールを決めて行動するので、翔太がパニックになることは少なくなっていたけれど、学校でお友だちとうまくコミュニケーションが取れなかったり、予定が急に変わってパニックになるなど、いろいろなトラブルを起こしていた。だから、少しでも翔太のことを知らないところに行きたい、そういう思

いで受験し、合格した。

同じ中学校から行った子は数人で、違うクラスになったため、全員がはじめましての子たちだった。でも、隣の席の子とすぐに打ち解け、徐々に友だちは増えていき、世界が広がった。高校に入って最初にできた友達のめいちゃんは、「一緒にバレエ部に入ろう」と言ってくれた。中学生のときは美術部で、あまり活動的ではなかったし休みたいときに休むことも簡単だった。

めいちゃんが言うには、バレエ部は平日だけじゃなく、土曜日から日曜日にも練習があるとのことだった。バレエはあんまりやったこととはないけれど、楽しそうだったので入ってみたい気持ちにはなった。でも、ふと翔太とお母さんのことが思い浮かんだ。翔太がお母さんと病院に行ったりするときは、私が洗濯物を取り込んだり夕食を作るのが当たり前になっていた。それに土日に部活があったら、お父さんもお母さんもあまりゆっくり休めな

いかもしれない。

夕食のときにそれとなくバレエ部に入っているか聞こうと思った。でも、夕食を食べたお母さんは言った。

「優菜の作るごはん本当においしい！ いつもありがとう」

その言葉を聞いて、バレエ部は無理だなと思った。それでもめいちゃんと遊びに行くときは、お母さんは喜んで見送ってくれた。めいちゃんとは映画の話をしたり、花火を見に行ったり、たくさん遊んだ。親友って思えるようになった。それでも、翔太のことは話せなかった。

「優菜のとことに泊りに行ってもいい？」

ある日めいちゃんに聞かれた。めいちゃんの家には何回か泊まりに行ったことがあった。翔太はルーティンから外れるのが大嫌い。普段の翔太ならいいけれど、癪癪を起している翔太やそれを止めている私やお母さんの姿を見られなくなかった。それとなく理由

をつけて断っていた。

「家に遊びに行くのもダメ？」

翔太がいなくてなら大丈夫かな、と思ったけど、写真とか見ているいろいろ聞かれたらいやだなとか思っただ断った。断り続けるのも苦しくなって、翔太のことを話した。めいちゃんは「そうなんだ」と言っただけ、何も聞いてこなかったし、家に行きたいと再びいうこともなかった。めいちゃんなら、全部受け入れてくれるかも、と期待していた自分がいたようで、すこしがっかりした。でも、仲の良さは変わらなかったし、どうやって家によべばいいのか考えなくてよくなったのは助かったなと思った。

めいちゃんとは夏休みに短期のアルバイトをしたり、一緒に大学のオープンキャンパスに行ったりもした。

「優菜はどこが第一志望？」

二年生の夏の終わり、めいちゃんが聞いてきた。

「うーん、まだはつきりと決めていない」

めいちゃんの第一志望の大学は、家から二時間以上かかるようで、一人暮らしも考えているらしかった。めいちゃんは一人っ子で、両親は反対しているらしい。それは心配だからだろう。

じゃあ私は……？

めいちゃんが大学の話を時々するから、誰にも話していないけど私も将来についてはいろいろ考えていた。翔太と暮らしてきたから、介護や看護士などになると、同じような子を持つ家族に共感してあげることでもあるかもしれない。

こだわりの強い子への対応なども、家族にそういう子がいなくて人より知っているだろう。

でも。

でも、私は絵を描くのが好きだった。小さいころから翔太の隣で一緒に絵を描く時間が好きだった。中学生になったとき、休みやす

いからという理由だけじゃなく、他のことを考えずに絵で自分の想いを表現するのが好きだった。

私の希望する芸術系の大学も遠く、家から通うのは難しいだろう。私が一人暮らしをしたいと言っても、両親は反対するかもしれない。でもその理由はめいちゃんとは違うと思う。

翔太が成長するにつれて落ち着いてきたものの、なにかあると癇癪を起こす。お父さんが会社などで家にいないときに力が強くなってきた翔太を止めるのはお母さん一人では大変だ。私がいれば、一緒に止めることができる。さらに、翔太に付き添って病院に行くとさなどの夕食の準備は私がしているから、家を離れたら両親は困るだろう。

心配じゃなく、困るから反対されるかな、と想像できた。

ある日の夜、ふとお母さんから「進路、どうする？」と聞かれた。私は近所で介護福祉

士を目指せる大学の名前を告げた。

「素敵ね。優菜なら頼れる介護福祉士になれるよ」

お母さんは喜んだ。やっぱりこの答えが正解だったんだ。

でもあまりこれ以上は話したくなくて、「宿題するから」と席を立ち、部屋に戻った。

部屋に戻り、ベッドに腰かけると胸がいっぱいになり、なぜだか涙がこぼれた。

大丈夫、この道の方が正しいんだ。

大丈夫、私の絵で芸術系の大学を目指せるはずもないし。

大丈夫、大丈夫……。

自分に言い聞かせれば言い聞かすほど、涙は止まらなかった。

そのとき、ノック音がした。

「優菜、入ってもいい？」

お母さんだった。

「え、無理」

こんな姿を見られたくない。しかし、お母

さんは扉の向こうから動かなかった。

「私ね、優業に頼ることが多くて、優業のことで知れていなかったかもしれない」

お母さんに聞かれないように、静かに鼻をすすりながら、私は話を聞いた。

さっきの態度で何かお母さんが気づいたのだろうか。

「優業が大好きだから、優業ときちんと話して知りたいの」

止まりかけていた涙が再びこぼれはじめた。鼻をすする音も大きくなる。私はベッドから立ち上がり、扉を開けた。

目の前のお母さんも泣いていた。お母さんは優しく私を抱きしめた。小学生のころ抱きしめてくれたときと同じように。

それから、芸術系の大学に行きたいけど自信はないこと。介護福祉士の大学も興味があること。ぐちゃぐちゃな思いを、思いついた順番に喋ったけれど、お母さんはうなずきながら聞いてくれた。

後日、お父さんも交えて将来の夢について

話した。まずは芸術系の大学を第一志望にすること。そのため、絵の塾に通うことが決まった。翔太のことについては、支援センターなどで相談し、関連機関など対応してもらうこともできることも知った。

「誰か一人が我慢し続けることのないようにしましょう」

お父さんは言った。

「優業の優しさに甘えて、ごめんね」

お母さんは謝ってくれたけど、私が知らないことが多かったのだ。両親に相談していたら、バレエ部に入ることも、めいちゃんを家に呼ぶことも可能だったかもしれない。私が無理と決めつけていただけかもしれない。

「私が言わなかったからだよ」

「それでも優業が話にくい空気を作ったのはお父さんたちだ。優業に話さなければいけない支援の話とかもできてなかったしね。優業は何も悪くないよ」

鼻の奥がつんとした。

そして、思った。バレエ部は無理だけど、もう一つはまだ間に合うかも。

「お友だち、お家に泊ってもいい？」

両親は快諾してくれた。もうめいちゃんは来たくないかもしれないと、ドキドキしたけど、お泊りに誘ったら、意外にも喜んでくれた。

「いいの？ 優菜の家楽しみ！」

めいちゃんもあまり深入りしてはいけないかと悩んでいたということを、そのときに知った。

めいちゃんのお泊りの前に、翔太にめいちゃんの写真を見せて、何時に到着して、何時からごはんを一緒に食べるなどの説明をした。

当日、翔太は家に入ってきためいちゃんを見て練習したように「いらつしやい」と言い、落ち着いて過ごすことができた。みんなで夕食を食べ、部屋にめいちゃんと戻って、夜が

更けるまで話をした。

「大学は違っても、いつまでも一緒にいようね」

眠りに落ちそうなときにめいちゃんは言った。

困ったことがあって、一人で解決できないこともあるだろう。でも相談したり他の人に手伝ってもらったら、解決できることもある。そう考えると心が軽くなった。

「私は大丈夫」と、言い聞かせてきたこともあった。でも今は将来の不安があっても、助けてくれる人たちもいるし、味方になってくれる人たちもいるから心から思う。

私は、大丈夫、と。

(終)

《最優秀賞》

随想部門

刻む

七草 かまど

私はいわゆる、被差別部落というところに生まれ育ちました。当たり前のように解放学級という学校とは別の学びの場があり、幼いうちはなぜ自分の村だけと不思議に思っていたものの、他の村の子よりいろんな経験ができるなんてラッキーだと毎週欠かさず参加していました。それからだんだん自分の村が被差別部落であることは理解していききましたが、それでもそれは過去のもの、もう終わったものだと思っていました。今振り返ってみれば、当時村の大人たちには確かにまだ部落

差別からくる歪みがありました。しかし子どもの頃の私自身は、過去のものだと思えるほどには何の不安もなく過ごすることができていました。

そんな私の人生に「部落」という言葉が影を落としたのは、今の夫と結婚する話になってからのことでした。夫から私の出身地を聞いた義父が、調べもせず部落だと言い当てたというのです。私は頭から何かで貫かれたように、しばらく黙って動けなくなりました。部落出身者が結婚差別を受ける話はもちろん知っていました。しかしそれも過去のものだと思っていたのです。だから、私はこの時初めて思い知ったのです。部落という概念は遠い歴史の一部などではなく、少し手を伸ばせば届くところにまだあるのだということ。そして、自分がまだ当事者であるということ。

それから夫家族の中でどんな会話があったのかはわかりません。ただ、義父母が私の前

で部落について言及することはありませんでした。そして、私たちの結婚は粛々と進んでいきました。けれど私の心にはずっと、義父の言葉がトゲのように引つかかっていた。部落出身者でありながら幸いにも結婚させてもらえた、などと思っていたくなかった。「これだから部落出身の人間は」などと思われないうちに、私の一挙手一投足が故郷を貶めないうちにしなければ、こんなことも思いたくなかった。何より、一時でも自分の大好きな故郷を、大好きな人たちを、恥ずかしい、疎ましいなどと思いたくなかったのです。

けれど私は次第に、そんなことを考えていること自体、私自身が故郷を差別していることになるのではないか、そう考えるようになってきました。もつとこの問題について知らなければならぬ。自分の村はどのようにして被差別部落となっていたのか、そもそも被差別部落とは何なのか。子どもが生まれて、自分のルーツを知りたいというこの気持ちほど

んどん強くなっていました。

私は故郷の図書館でたくさん資料を漁り、改めて自分の村の生い立ちと部落差別について勉強を開始しました。

ぶ厚い市町村史には、部落差別についての記載は一切ありませんでした。そこで故郷の部落差別について書かれた資料を探し、内容をすり合わせていきました。そうして見えてきたのは、私の先祖たちが差別を受けながらも早魃や洪水、戦争、金融危機、それらのなかを必死に生き抜いてきた姿です。先祖の暮らしを知るのはとても興味深く、楽しく、しかして悔しく、悲しい作業でした。

市町村史には地場産業が発展していく過程は詳しく書かれていても、私の村の人たちだけは雇ってもらえなかったことは書かれていませんでした。不当な除外を受け何度裁判を起こしても、負けたと書いてあるだけで裁判所の杜撰な判決内容は書かれていませんでした。そして子どもの頃村の自慢だった大きな

お寺は、もしかしたら被差別部落だからとお金をもらって大きく建てられたのではないかと一時は恥じさえたあのお寺は、先祖たちが他の村と対等であると示すために必死な思いで建てたものだと思って本当に申し訳なくなりました。きつと一つの行間に、一つひとつの文字の間に、部落差別に限らず書かれなかった昔の人の喜怒哀楽がたくさんたくさん詰まっているのだと思いました。ずっしりと、手にその重みを感じながら読み進めていきました。

さて、部落差別について調べ始めた私は、まず今まで何もわかっていなかったことを思い知りました。ならば私が通っていた解放学級は無意味だったのでしょうか？ 私はそうは思いません。あの日々と義父の言葉がなければ、ここまで学び直そうとは思わなかったでしょう。それに、過去を知っていくことに、解放学級で見学に行ったあの場所や、おばあさんたちに教えてもらって作ったあの料理、

それらがぱちりぱちりとパズルのピースをはめるように紐づいて、脳裏にありありと思いついて出されてきたのです。あの日々は確かに私の中に種をまいてくれていた、それが今ようやく芽吹いたのだと思いました。

今は少子化などで解放学級はなくなり、町全体を対象とした広義の人権学習活動に変わっているようです。部落差別について教わることは以前よりずっと少なくなっているでしょう。

実は私が解放学級に通っていた頃、村の大人は部落差別について語り継ぐべきだとする人たちと、過去は早く葬って普通の村として生きるべきだという人たちで割れていました。そして私が改めてこの問題について学び直している最中、SNSでこの後者の人たちと同じ考えの人がたくさんいることを知りました。彼らは口をそろえてこう書きこんでいました。「寝た子を起こすな」。私も当初、この考えには一理あると思いました。しかし、

私がそうであったように、突然誰かによつて叩き起こされてしまうこともあるでしょう。ではさらに世代が進み、全員が部落差別など忘れてしまったら？ 早くそうなるためにも、部落差別は語り継ぐべきではないのではないか？ ただ、そう考えたとき、私の心の隅には納得しきれないモヤモヤが残りました。いい例えが浮かばないのですが、「この家の住人は極悪人だがみんな忘れているので問題ない」というのと、「この家の住人は極悪人だと言われていたが実は冤罪で、みんなもそれを知っているのに気にしていない」というのでは雲泥の差があると思うのです。寝たならば起こさなくても構わない。けれど、その子は起きても問題のない子なのです。部落差別の元となったエタやヒンというのは、かつて人や動物の死を扱った人たち、また穢れを払う力を持つゆえにその身に穢れを蓄積すると考えられた人たちなど、他の職業と同じく感謝されこそすれ何ら差別される謂れの

ない人たちです。そんなしょうもない差別を、私たち日本人は脈々と大事に受け継いできてしまった。みんながそれを正しく知るところができれば、部落差別の問題は寝かせておく必要もなく、起きても暴れ出すことはないのではないのでしょうか？

また、部落差別についての講演会で、私はもう一つ印象的な言葉を聞きました。「言葉が世界を区切る」というものです。紐という言葉しか存在しなければ、人はどのような太さでも紐だと認識する。しかし縄や綱などの言葉が生まれると、ただの紐はもはや紐ではなく縄に、綱になると。私たち人間はたくさんの物事に名前をつけて、それらを区別して生きてきました。エタやヒン、部落、新平民という言葉は、私の先祖たちとその周囲との間に溝を刻みました。やがて先祖たちに向けられる視線や態度は、先祖たちの心を切り刻んでいきました。守ってくれるべき行政は、メディアは、差別を助長して先祖たちの

人権を切り刻みました。子孫までをも貫く、深い深い傷を刻まれました。悲しみを刻まれました。怒りを、悔しさを刻み込まれました。それでも、先祖たちは必死に生きて命をつないでくれた。闘ってくれた。だから私はこうして生きている。そう考えると、子孫である私の心に今刻むべきは悲しみでも羞恥でもなく、先祖たちへの尊敬と感謝、そしてその地に生まれた誇りなのだと思います。もう部落出身であることを恥ずかしいなどと、疎ましいなどと思わない。私は故郷と、先祖たちがもつと大好きになりました。

戦後はつまり戦前である、と言った方がいます。歴史を見ても、私たち人間は差別を作り出すのが得意な生き物。一つ差別が根絶されても、また新たな差別が生まれてしまうかもしれません。そうならないために、もしそうなたとしても正しく動けるように、私はこれからも学び、考え続けていかなければならないと思っています。

私の勉強は今ようやく始まったばかりです。けれど、手を伸ばせばまだ届くところにある問題だからこそ、差別の中を生きてきた人たちがまだ元気でいてくれる今だからこそ、教えてもらえることがたくさんあると思うのです。そして今度は私が、それを必要とする人に語り継いでいけたらいい。それまでに取り急ぎ、今の気持ちをここに刻んでおきたいと思いました。



《最優秀賞》

詩

部門

いのちの命

森本 宝乃実

いのちの命

いのちの命 いのちの命

私のいのちは ここにある

体の真ん中 少し上

ドクンドクン 生きている

ドクンドクン 生きている

うれしい時も 楽しい時も

悲しい時も 疲れている時も

ドクンドクン 生きている

ドクンドクン 生きている

食べ物に消費期限があるように

乾電池に寿命があるように

いのちにも命がある

いのちにも命がある

音も聞こえない 目にも見えない

力強く輝いている優しくまあるくこだまする

いのちの命 いのちの命

その命は 他人が奪うことは出来ない

その命は 他人が傷つけることも出来ない

その命は 自分で奪うことは出来ない

その命は 自分で傷つけることも出来ない

ドクンドクン 生きている

ドクンドクン 生きている

辛い時は深呼吸

悲しい時も深呼吸

ドクンドクンがんばれ がんばれ

ドクンドクンここから ここから

嬉しい時も深呼吸

楽しい時も深呼吸

ドクンドクンほら出来た

ドクンドクン乗りこえた

ドクンドクン生きていて
ドクンドクン生きている
私の命はここにある
私の命も輝いて
あなたの命も輝いて
ドクンドクン生きていこう
ドクンドクン生きていこう



《最優秀賞》

創作童話部門

二人が生きているということ

原口 来瞳

まだだよ、また望美のことばかり。

ランドセルを乱暴に背負って、家を飛び出した。最近、母さんからの当たりが強い。授業参観の返事を書けたかどうか聞いただけなのに。「今、望美の面倒を見ているのが分からないの？」って怒鳴ることないでしょ。

私が幼稚園のときに生まれた望美は、身体が弱い。何度も大きな手術をしていて、人生の半分以上は病院暮らしだ。望美は口から食事がとれなくて、おなかに直接ご飯を流し込んでいる。望美はそれがものすごく嫌みたい

で、ご飯のたびに泣いている。それを母さんは必死にだめる。だからか、時間のない朝はすごくイライラしている。

母さんから望美は成長がすごくゆっくりなのと言われた。望美はいまだに上手く話せず、気持ちを伝えられない。お姉ちゃんが守ってあげてねと、望美が退院した日に言われた。

望美が生まれたときはもちろんうれしかった。でも、母さんは望美にかかりつきりになって、私のことなんてほったらかし。バレーの応援にも来なくなつて、代わりにご飯の準備や洗たくを任されるようになった。「お姉ちゃん、お願い」という言葉を何回言われただろう。母さんは、私のことを頼れるお姉ちゃんと思っているのかもしれない。でも、その責任感が時々しんどい。色々つらいことはある。でも、一番つらいのは私を「お姉ちゃん」としか呼ばないこと。もう名前まで「夏希」とは言ってくれないことが一番悲し

かった。

六月に入っただけだというのに、真夏みたいに暑い日だった。うだるような暑さで、学校からの帰り道ですら汗がダラダラ流れた。遙か遠くの青空に、大きな入道雲がわき上がっていて、ひと雨来るんじゃないか、洗たく物を入れないとなんて考えていた。

玄関に入る前から、家から泣き声が聞こえてきた。パニックになったときの望美の声だ。あの声のとき、いつも良くないことが起きる。背筋が冷たくなり、急いでリビングに駆け込んだ。

目に飛び込んできたのは散らかった部屋、パニックで暴れる望美、猫なで声で慰める母さん、そして、破かれたスケッチブック。

「私のスケッチブック……！」

ひどすぎる。慌てて駆け寄って中身を確認したけれど、どこもかしこもビリビリになっていた。バレー友達に描いてもらった絵だっ

てあったのに。身体がふるえて頭が真っ白になる。でも母さんはふり向きもせずに言った。

「お姉ちゃん、しっかり片づけておいて。望美が間違つて口に入れたらどうするの」

えっ？ 私のせい？ 私の大事なスケッチブックだよ。なんで望美は何してもいいの？

「なんで私が悪くなるの？」

「そこらへんに置きっぱなしにしてるからよ」

「また望美が私のものを壊したんだよ？」

何度目かの母さんと言い争い。それと同時に望美の興奮も激しくなり、泣き叫ぶ。

なんで望美が泣いているの？ 泣きたいのはこっちなのに！ あんたのせいで！ 頭が怒りで染まっていく。

「こんなことなら、妹なんていらなかった！」

本音を吐き出した瞬間、左手に鋭い衝撃が走った。母さんが叩いたようだった。

「なんてこと言うの！ 望美に謝って！」

叱っているはずの母さんの声が、涙ぐんで聞こえたのは気のせい？でも、もうどうでもいい。また望美をかばうんだ。叩かれたシヨックよりも諦めの気持ちの方が大きかった。じわりと目元が熱くなり、スケッチブックを抱きかかえたまま自室へ走った。嫌い、みんな嫌い。私のことはどうでもいいんだね。勉強もバレも家事も、見えないところで頑張っているのに。私はこんなに頑張っているのに。頑張っている私、バカみたい。これからも望美のためにがまんしないとダメなの？じゃあ望美だけでいいじゃない。私なんていらないうしよ。私はずっとベッドに突っ伏して泣いていた。

「そうかい、それはしんどかったねえ」
縁側にいると、さわやかな風が舞い込んできく。私の話を聞いたおばあちゃんは、冷たい麦茶を運んでくれた。

今日は母さんにも望美にも会いたくなかつ

たから、おばあちゃんの家に来ていた。どうしても心が苦しいとき、私はここに来る。おばあちゃんの家は、私が「お姉ちゃん」じゃなくいい場所。昨日のことを話そうと来たら、おばあちゃんは私の泣き腫らした目を見て、すぐ事情を察してくれた。

「お姉ちゃんだからって、何でもがまんするの、もう疲れた」

縁側に仰向けになりながら、本音をもらす。こうやって息抜きをしないと壊れてしまう気がする。パンパンに張りつめたボールがいつか破裂してしまうみたいに。

実はおばあちゃんに会いに来たのは、訳があった。学校から出された宿題が、来週の授業参観で発表する作文『自分の名前』なのだ。家の人に名前の由来を聞いて、それに対する自分の思いを書く宿題だ。父さんは仕事でいないし、あのケンカの後で母さんに聞きたくなかった。そこで、おばあちゃんなら何か知っているかとも思い、助けを求めに来たの

だ。

「夏希ちゃんの名前ねえ」

宿題のことを話すと、おばあちゃんがうちわをおおぎながらつぶやいた。遠くを見て、思い出そうとしている。夏希か。母さんが最後にそう呼んでくれたのはいつだったつけ。「夏希ちゃんは、望美ちゃんが生まれてきたときのことを覚えている？」

予期していなかった質問におどろいて、思わず身体を起こした。なんで望美？ どうしてそんなことを聞くのか分からない。

「望美ちゃんは生まれたとき、本当に命が危なくってねえ」

もう五年前のことだ。クリスマスに生まれるはずだった望美は四か月も早く生まれてきた。生まれたはずの妹になかなか会わせてもらえなくて、私は不満だった。そして、ようやく会えた望美の身体が大人の手のひらぐらいいで、しかも管だらけで、信じられなかった。「望美ちゃんは長く生きられないかもしれないま

せん、ってお医者さんから言われたの。だから、幸子はずっと泣いて、自分を責めていた」

「そうだったんだ……」

あんな気丈な母さんの泣いているところが想像できない。

「でもね」

おばあちゃんが不意に言葉を切る。何か大切な言葉を紡ぎだそうとしているようだった。

「夏希ちゃんのもとに来てくれたこの子には、きつと生きる力がある。そう幸子は考えたの。未来を懸命に生きてほしい。そんな望みを込めて『望美』とつけたの。……気づいた？ 『夏希』と『望美』で『希望』になるのよ」

はっと分かった瞬間、おばあちゃんの方を見た。おばあちゃんは目を細めていた。母さんが希望を込めて私達の名前を考えてくれたの？ つながれた私と望美の名前。

「夏希ちゃんと望美ちゃん、二人の存在自体

が希望そのもののなの。だから、私なんていなくなればいいだなんて、思わないでね」

優しい言葉に、がまんし続けた心がほぐれていった。目頭が熱くなつて、ボロボロと涙がこぼれた。おばあちゃんが身体を包み込むように抱きしめた。長い間忘れていた感覚だ。

「幸子もね、きつと夏希ちゃんを大切に思っている。でも、余裕がないんだろうね」

そういえば、母さんの笑った顔見てない。ずっと張りつめた顔で、何かに追われている。「夏希ちゃんには夏希ちゃんの未来がある。自分らしく生きてほしいの。でも、望美ちゃんと助け合つて生きてほしいのも本当。難しいけれど、どちらの道も歩んでほしい」

涙があとからあとからあふれ、おばあちゃんの服に染み込んでいった。おばあちゃんの体温と優しさがどうしようもなく温かくて、切なくて、込みあがつてくる涙が止まらない。自分の存在が初めて認められた気がした。母

さんの想いも分かった。張りつめた顔の下で、ずっと望美と私の未来を想ってくれていた。

「つらくなつたら、いつでもおいで」

次の日、いつも通り自分でご飯の準備をして、朝早くに家を出た。でも、いつもとちよつと違う。食卓に授業参観のお知らせと、走り書きのメモを置いてきた。

「望美を連れてきてほしい」

いよいよ授業参観の日だ。母さんと望美が来るかどうかは分からない。母さんはあまり望美を外に出さない。病気をもらつてきてはいけないからというのものもあるし、車イスの移動は大変だからというのものもある。でも、どうしても今日の発表を二人には聞いてほしかった。そのとき、目の端に車イスが映った気がした。もしかして来ている？

「では次、村田さんどうぞ」

名前を呼ばれ、慌てて返事して立ち上がる。

クラス中の視線を感じる。大丈夫。落ち着いて。きつと聞いてくれているはずだから。

「私の名前は、妹の名前と、二人で一つの意味を表します」

妹が抱えている病気。夏希と望美がおりなす意味。その一方が欠けてもだめなこと。自分の思いを精一杯伝えた。

「……私達の名前が希望と未来を表すこと。これは私の自慢です」

発表が終わると、クラス中で拍手が巻き起こった。ちらつと母さんの方を見ると、そつと目元を押さえていた。顔はよく見えなかったけど、おだやかな笑顔だった。私の思い、伝わったかな。望美も心なしか笑っていたような、いや、きつと笑っていたはず。

ねえ、望美。いつか夏希お姉ちゃんって呼んでくれる？ ゆっくりでいいから、大きくなったら絶対呼んでね。私、待っているから。





優
秀
賞

《優秀賞・一般の部》

小説部門

あの雨の日に

梶本 千紗姫

ぽつり、と鼻の頭に雨粒が当たる。

「あ、降ってきちゃった」

しばらくもつかと思っていたのだが。もう少し早く部活を切り上げれば良かった。無意味な後悔をしながら、わたしは手提げかばんの中から折り畳み傘を取り出す。

それからしばらくしてから、信号の間隔が短めのスクランブル交差点を急いで渡り切ったときだった。

「あの、すみません。道を教えて頂けませんか」

声のする方を見れば、そこには六十代くらいの、上品そうなおじいさんが立っていた。

「私は目が悪いのですが、道が分からなくなってしまう。ヒガシスーパ―は、どちらの方向でしょうか」

ヒガシスーパ―というのは、わたしの通学路の少し入ったところにあるスーパーマーケットのことだ。そこならわたしも分かると安心しながら、出来るだけ聞き取りやすそうな声で答える。

「ちょうどその店、帰り道にあるんです。良ければ、一緒に行きましょうか？」

そう言ってみたはいいものの、視覚障がい者の補助の仕方をわたしは知らない。白杖だって、ついさつき目が悪いと聞いて初めて気づいたくらいだった。確か、小学校のときにそういう特別授業があった気がするけれど、もうすっかり忘れてしまっている。考え込むわたしを見かねてか、おじいさんは静かに申し出た。

「腕だけ、持たせて頂けたら大丈夫ですよ」

「分かりました。じゃあ」

わたしはほっとしながら傘を持ち替え、片手を空ける。それを差し出せば、おじいさんはそっと掴む。そして、わたしが歩き出すのに合わせて、おじいさんも足を進める。

「でも、本当にあなたのような優しい方がいて助かりました。……雨の日は少し、方向感覚が狂ってしまうのでね。」

「へえ、そうなんです。大変ですね」

視覚に障がいがあると、どういう生活の送り方になるのだろうか。自身の感覚と白杖が頼りの生活。その大変さの一端を垣間見て、わたしは思わずそんなことを言ってしまった。しばらく、傘に雨粒が打ちつける音のみが響く。

「お嬢さん、大学生ですか？」

「いえ、高校生です。すぐそこ」

「ああ、あそこは良い学校ですよねえ」

他愛もない話をしていると、そろそろ目的

地のスーパ―が見えてきた。

「お嬢さんは、そうすると福祉の分野を考えていたりするんですか？」

わたしは、この前の進路希望調査に何を書いたか思いだそうとする。確か、文章を書くのが好きだからという曖昧な理由で近くの国公立大学の文学部志望って書いたつけ。それすらも怪しかったが、福祉関係の大学や学部について調べた記憶は無かった。

「福祉はそこまで……。どちらかと言えば文学が好きで、そっちの方に行こうかと」

「なるほど、本とかよく読むんですか？」

「はい。あと書くのも。部活動も文芸部なんです」

それはすごい、作家さんの卵じゃないですか、と大げさなおじいさんが言うので、思わず笑ってしまう。

「でも、思い通りに書けるわけじゃなくて。書きたいものを書けたらなって、思うときもあります」

「へえ、色々考えなくてはいけないんですね」
「そうこう言っているうちに、お目当てのスーパーが見えてきた。」

「そろそろヒガスパー、着きますよ」

「ああ、こんなに間違っていましたか」

「おじいさんは、いやはや、雨の日は困ると後頭部を掻きながら笑っている。どうやら事情を知っているらしく、店員さんが慌てて出てくる。こちらでも任せておけば、もう大丈夫だろう。」

「じゃあわたしはこの辺で」

「ありがとうございます。……本当に綺麗なお嬢さんだ」

「そう言っておじいさんは深々と礼をする
と、店員さんに導かれて店内へ入っていった。
「……ありがとうございます、偉い子だね」

去り際、店員さんはそう、わたしに耳打ちをした。当たり前だと思って自然とした行動が、これほどの人からの感謝を運んでくるとは思ってもみなかった。普段は注目を浴びた

くなくてほめられるのを避けてきたわたしだが、今日ばかりは違った。胸に手を当てると、とくとくと温かい血液が巡っているのが分かる。空を見上げれば、いつのまにか重い雲は散っていた。そして、いつもの通学路に戻ろうかとしたそのときだった。

「あの……、大丈夫？」

近くにある女子高の制服に身を包む少女にそう声をかけられた。

「わたしは大丈夫ですけど……」

問いの意味を捉えかねて、語尾は消えかけてしまう。

「いや、その、さっき男の人に腕をつかまれてるのが見えたから。別れ際も綺麗だね、とか言ってたし……。私の勘違いなら良いんです、ごめんなさい」

「そう彼女は一息で言う、その勘違いを解こうともせず走り去ってしまった。急に、からだ中を巡る血液が熱を失っていく。汗ばんだ制服は、余計わたしの体温を奪う。彼女に

は、わたしがおいさんに絡まれているように見えたのだろうか。ふと顔を上げれば、わたしを見る数人と目が合った。彼らの目にも、同じように映っているのだろうか。女子高生の腕を年配高齢男性が軽く持つことは、この社会で許されていないのだろうか。……それがたとえ、視覚障がい者を案内しているだけだったとしても。

わたしは夢中で駅まで逃げた。また空を覆い始めた鈍色の雲から落ちてきた滴は、アスファルトの染みを大きくした。

次の日。あくびを噛み殺しながらどうにか授業をこなした後、わたしは部活へ行くことにした。文芸部の部室は、図書室の一角にある。図書室自体が一番奥の棟にあるので、廊下の喧騒とは無縁の心地良い空間だった。

「失礼します」

活動日ではないので誰もいないだろうと思つてドアを開けると、そこには見慣れた人

影がいた。

「風先輩、今日も来てたんですね」

文芸部唯一の三年生で、わたしと仲良くしてくれている木村風先輩だった。出身が関西というわけでもないのにバカでかい関西弁で喋る。わたしとは対照的なタイプだけれど、気づけばこの人とはばかり喋っている。

「りん子も来たんや」

そして、こうやってわたしのことを下の名前で呼んでくれるのも、この人くらいだ。

「雨雲レーダーによれば、あと一時間以内に雨やむらしいので」

「そっかそっか……ほんまにりん子雨嫌いな」

風先輩は苦笑いしながら、部室内の冷蔵庫から出した麦茶を渡してくれる。

「あ、せや、昨日りん子、スーパーにおらんかった？」

「昨日ですか」

昨日はスーパー前まである人を案内しただ

けですよ。そう言おうとしたけれど、それは言葉にならなかった。わたしは沈黙する。

「あーでも後ろ姿だけやったからな。人違いかも」

風先輩はそんなわたしの空気を察知したらしく、片手をヒラヒラさせながら、忘れて、とおどけたように言う。それに甘えてわたしは、小説執筆用のパソコンの電源を入れる。その画面が明るくなつてパスワードを入力し終わったとき、ちょうどドアが開いた。

「上野ちゃん、いる？」

「田所先生。わたし、いますよ」

現れたのは、文芸部顧問の田所先生だった。この竹を割つたような性格の国語教師はわたしのクラス担任でもあり、わたしのことは名字ちゃん付けで呼ぶ。先生が口を開いた。「次のコンクールの話。前見せてくれた筋書きじゃ、駄目だと思った」

忌憚なく発せられるその言葉に、わたしの呼吸は浅くなる。何度か、深呼吸する。

「出来は悪くないし、それなりのものが書ける。でも、あのコンクールには合っていない。入賞したいのなら、前言ったようなジャンルにすべき」

それでもまだ、脳は酸素を欲していた。

「……考え直します」

頑張つて、と片手を上げて言いながら田所先生は颯爽と去っていく。それだけ言うためにここまで来たらしい。

「りん子はさ、それでええん？」

わたしたちのやり取りを頬杖を突きながら見守っていた風先輩が、そのままの姿勢でわたしに問う。

「田所先生だって、わたしのことを考えてくれてるからの意見だろうし……」

「りん子はほんまに力があるから、そのりん子が本心で書いた小説は絶対ええもんができると思うねんけどな」

風先輩は両手を頭の上で組んでぐいっと伸ばす。それから、自身の心臓のあたりを力強

くたたく。

「大事なんは、ここやから」

「……そう言われてもなあ」

わたしは目の前のキーボードに手を伸ばす。本心。ほんしん。ホンシン。わたしの手の動きに合わせて、さまざまな形の「本心」が人工の光の上に踊る。

「本心か……」

本心だけで生きることができれば、わたしだってそうしたい。周りの目を気にして人助けの後に逃げるなんてしたくなかったし、小説だって書きたいものを書きたい。だけど、わたしに向けられた他人からの優しさが、そうさせてくれない。わたしには、投げかけられたその優しさを、無視して捨ておく勇気がない。

デリートキーを長押ししたのち、窓の外を見やった。雨は上がっていたけれど、雲は厚いままだった。

あの日からしばらく経った頃、おじいさんを見かけることが増えた。白杖を持つ人に気づくことも増えたし、きつとわたしの世界を見る目が変わったのだろう。ただわたしは気づいても手を差し伸べるとこはずっとできなかった。助けを求められていないことを言い訳にしながら、何度もそのすぐそばを素通りした。

そしてわたしは、まだ新しい筋書きを書けていなかった。過ぎる時間に比例して、焦りばかりが膨らむ。今日も部活に来てみたはいものの、さつきから手は少しも動いていない。そんなわたしを見かねた風先輩が、冷蔵庫から取り出したペットボトルの緑茶を渡ししてくれる。そのときちょうど、部室の重いドアが勢いよく開け放たれた。

「また田所先生来よった」

「上野ちゃん、書けた？」

こここのところ毎日聞いたセリフを、今日また聞く羽目になった。そのせいで言葉は乱暴

になる。

「田所先生、一日でぱっと書けるならわたしは今こんなに苦しんでないし……。スランプなんですってば」

しかしそれを気にするそぶりも見せず、先生はわたしの顔に一枚のチラシを突き付ける。そこには「小学生障がい者体験教室・ボランティア募集」の文字があった。

「なんですか、これ」

「詳細は全部あるから読みなさい。……上野ちゃん、この前福祉分野への興味があるって言ってたでしょ」

興味なんてありません、と言ってしまうたかった。確か、この前の進路希望のワークシートの第三希望あたりで書いたはずだった。それだって、三つも希望分野が思いつかなかったときにふとおじいさんの言葉を思い出して書いただけだった。

「とりあえず渡しておくから。……上野ちゃん、最近休日はずっと家なんですよ。そんな

状態じゃスランプからは抜け出せない」

「……考えてみます」

それを聞くと、田所先生はすぐに退室した。あの人は、女子バスケの顧問もやっているから、いつも忙しくしている。

「りん子、それ行く気ないときの答えやろ」

風先輩はにやにやしながらこちらを見てくる。

「だって……」

自身が本心よりも周囲の目を優先する人間だということにわたしは最近気づいた。その人間は再び助けを求められたとき、同じように手を取ることができるだろうか。その人間が素通りしていく姿が簡単に想像できるという事実が、わたしにとってはひどく恐ろしい。だから、できるだけその事実が浮かび上がってきそうな場所には行きたくない。

先輩の言葉には応えられないまま、わたしはペットボトルに口をつける。緑茶は思っていた以上に渋くて、そして苦かった。

家に帰って一息ついたあと、わたしはパソコンの画面を眺めていた。昼間もパソコンで酷使した目に、容赦なくブルーライトが注ぐ。開いているのはあのチラシから辿ったホームページだ。行く気は無かったけれど、でもそのままチラシを捨てる気にもなれなかった。画面をスクロールしていくと、主催している大学生グループの代表者のコメントが出てきた。飛ばし読みしていたわたしだったが、ある一文に目を奪われる。

「無知は、ときに何よりも鋭い刃となり、ときに何よりも高い壁となります」

わたしは、あのとき無知が刃になりかけたのを見た。もしあの女子高生が、直接おじいさんに声をかけたら、どうなっていたか。そして、そのことに気づいたわたしは、もう無知のままでは居られない。けれど一歩踏み込んで自分の弱さを突き付けられるのは恐かったから、知らないフリをしていた。でもそのフリだって、刃にも壁にもなり得る。

わたしは震える右手を鼓舞しながら、申し込みフォームのリンクをクリックした。

今日は、この前のボランティアに応募した体験教室の日だ。想像していたよりもボランティアの仕事は多い。市役所から借りた障がい者体験グッズを用意したり、参加者を案内したりしていると、瞬く間に時間が過ぎた。昼休憩の間に一息ついていっていると、主催者の大学生に声をかけられた。

「ボランティアの子も、せっかくだから体験してみる？」

「ぜひ、してみたいです」

ブースはいくつかあったけれど、わたしは迷わず視覚障がい者体験のブースに行った。アイマスク、白杖、誘導用ブロックを用いて、二人一組でガイドヘルプ体験をするものだ。大学生と組になって、わたしが補助される側の役になる。アイマスクをつけると、視界が一気に闇に覆われた。それはただの闇ではな

い。周囲の雑踏から来る圧迫感で、自分が今知らない場所で漂っているような錯覚に陥らせるような闇。

「手は、補助者のひじの上のあたりを軽く握ってください。そうそう、そんな感じ」

しかし、補助者がいると、ちゃんと地面の上に立っているのだという実感が湧いてくる。

「補助のときは、ちゃんとコミュニケーションをとらなきゃいけない。それは、見えないうっていうのは、周囲の状況だけじゃなくて、自分自身も認識できないことにもつながるから」

じゃあ歩こう、という声に合わせて一歩踏み出す。その地面も、普段と違うかたさに見える。だが、補助者が馴れているおかげで、わたしは無事に終わることができた。

アイマスクを外すと、窓から差し込んだ自然光がゆるやかに網膜に届く。自然の光をこれほどまでに感じたのは、今この瞬間が初め

てだったかもしれない。でもきつと、おじいさんにとってはあれに近い闇が普通なのだ。そして、いつも自分が今どこにいるのかさえ、分らない不安にさらされているのだ。その闇の中で差し伸べられた手が、かけられた「大丈夫ですか」の一言が、どれほどの価値を持つのかは想像に難くない。

「どうでした？体験してみて」

「怖かったです。視覚障がいのある方は、困っているように見えなくても、いつもあれと似た恐怖の中にいるってことも分かりました」

「うん、日ごろから助けてほしいと頼まれなくても一言掛けられるようになれば、もっと優しい社会になるよね。他に何か聞きたいことはありますか？」

わたしは少し考えてから、これまで抱えていた疑問を口にする。

「視覚に障がいのある人って、どういう風に見えてるんですか」

大学生は、もちろん人にもよるけど、と前置きしてから説明してくれた。

「全く見えないって人ばかりじゃない、視界が白く濁っていたり、歪んでいたりと、一部が欠けていたり。あとは、暗く見えたり、逆に明るすぎて反射がまぶしかったりする。色やだいたいの形は分かっても、細かいところは不明瞭な場合も多いね」

「そうなんですね……」

わたしはその話を聞きながら、あの日のことを思い出していた。おじいさんはセーラー服を着たわたしを見て、大学生かと尋ねた。だからおそらく、おじいさんはほとんど見えていないのだろう。そのおじいさんが、去り際わたしの綺麗なお嬢さんと言った。

おじいさんが褒めたのは、わたしの心の方だ。わたしが見失っていたものが、おじいさんの目にははっきりと見えていたのだ。

「色々教えて下さって、ありがとうございます」

「いえいえ。僕の方こそ、こんな熱心な子がいると分かって嬉しいよ。それに、知らないことに気づくのが一番大事だしね」

「そうですね。まずはそこからですよ」

「うん。自分が知らぬ間に、知らなかったじゃ済まされないほど人を傷つける、なんてことは、無くしていきたい」

わたしは大学生の言葉を聞いて、あのチラシのコメントは、この人が書いたのだと確信していた。

「じゃあ、昼からお手伝いよろしくね」

「はいっ」

わたしの本心からの行動は、きっと誰かの力になれる。その行動は、他人の善意を捨て置くことになるかもしれない。けれど、知らないフリをして他人に刃を突き付けることや、高い壁を積み上げることよりかは幾倍もましだった。おじいさんに綺麗だと言われたその本心を、わたしはもっと大切にしたい。窓からの光が、今はただ眩しい。

こんこんと、小気味よいノックの音が響く。できれば職員室には入りたくなかったけれど、今回ばかりはそう言っていられない。

「失礼します。文芸部の上野りん子です。田所先生に用があつて来ました」

できるだけ大きな声で言つたつもりだったが、田所先生は気付かない。仕方がないので席の近くまで行き、直接声をかける。

「田所先生、今お時間大丈夫ですか」

「ああ、上野ちゃん。どうしたの」

わたしは、胸に抱えていた原稿用紙の束を先生に差し出す。

「これを見ていただけますか。新しい小説です」

先生は、何度かまばたきをしてから、その紙の束を受け取った。驚くのも無理はない。だってつい先日まで筋書きさえ終えていなかったわたしが、数十枚にも及ぶ下書きを持ってきたのだから。

「……書けたの」

「書けたと言うか……。わたしがずっと書きたかったものを形にしました」

「なるほどね。添削されまくるの、覚悟してちょうだい」

田所先生の言葉はいつも通りの忌憚のなさだ。でも先生は案外、嬉しそうな表情を浮かべていた。

学校を出てしばらくしてから、雨が降り出した。ぼつり、と鼻の頭に雨粒が当たると、わたしは手提げかばんから取り出した折り畳み傘を開く。そして、スクランブル交差点を急いで渡る。息を整えつつ前を見れば、そこにはあのおじいさんがいた。

今、おじいさんは特に困っていないかもしれない。でも、わたしはその闇の中で、自分が頼りなく漂う感覚になる恐怖を知っている。その中で伸べられる手の心強さも知っている。そして何より、わたしの本心を大切にしたいから。

「その白杖のおじいさん。わたし、通りかかった者ですが、何かお困りのことはありませんか?……今日、雨なので」

わたしは、何度も頭の中で練習した言葉を口にした。体験教室のあと、視覚障がい者になり、ネットで調べてみたのだった。思っていた以上に障がいのある方への声のかけ方、手助けの仕方をまとめているサイトは多く、助かった。

「もしかして……、この前のお嬢さんかい? 今は大丈夫だよ。だけどね」

おじいさんはゆっくりと、微笑みながら言葉を紡ぐ。

「こうやって声をかけてくれて、とても嬉しいよ」

人からどう見られるかよりも、自分がどう思っているかを大切にできるほうがずっとい。わたしの本心からした行動はきつと誰かの聞か少しでも照らし、わたしの心さえも温

める光となるから。そして、その一筋の光はやがて、社会全体を照らす大きなものになるから。

わたしはやつと見つけた自分の綺麗な本心を、優しく抱えてこれから生きていこう。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

小説部門

春にあかりは輝きだす

大西 莉央

春。新学期。私はこの春から中学生になった。新しい場所であるが、小学校からの友達も多い。それでも初めての子も山ほどいる。

「楓——！おはよう！」

「あ。幸知、おはようー。相変わらず朝から元気だね。幸知らしい」

保育園からの付き合いで、幼馴染の幸知だ。いつも困ったときは助けてくれる、そんな友達思いの親友。

「そりゃあもちろん！だって私たち今日から中学生だよ？」

「うん、確かにそうだね。楽しみ」

実際、私も心の中ではわくわくしている。それにしても彼女はまぶしい。それは太陽の光が彼女と重なったからなのか、彼女自身の輝きなのかはわからない。暖かい。幸知とたわいのない話をしながら学校に向かった。

入学式。体育館に入ると、大勢の人たちがいた。入学式の体育館は彩られており、私はこの雰囲気が好きだ。あつという間に式は終わり、クラスが発表され、教室へ案内された。私は一年四組だった。因みに幸知は、

「楓！何組だった？」

「えっと、私は四組だったよ。幸知は？」

「違うクラスだ……。私は三組だ」

「残念だね……。でもさ、三組なら教室も近いじゃん！いつでも四組来てよ」

「うん！もちろん！」

という感じで、クラスは離れてしまった。教室では、昨年小学校六年生の時同じクラスだった子も多かったため、すぐに仲良くなっ

た。

初めて会う子もいたが、その子たちともすぐに仲良くなれそうだった。でも、その中で、ある子とは仲良くなれなかった。いつも静かでおとなしい。髪は長く、読書が好きなよう

だ。
「初めまして。よろしくね。それ何の本？」
「……」

（ぺこつ）彼女は一度頭を下げた。

（え……。私、変なこと言ったのかな……。どうしよう、やりすぎた……？）

そのまま彼女は本を読み進めている。そこからどうすればいいのかわからず、私から先に身を引いてしまった。

一日が終わり、家で学校の用意をしながら今日のことを思い出してみる。

（んー。やっぱりぐいぐい行き過ぎた？うるさいのとか、私みたいなのが嫌いだったりする？ならどうしよう。初対面からの印象最悪じゃん。なら明日こそ。明日はさりげなく落

ち着いた感じで話かけよう。うん）

そう自分に言い聞かせる頃には、歯も磨き、ベッドに入っていた。そのおかげで悩みが消えるとうぐつすり眠れた。

朝。いつもより早く起きることができた。

私は朝が弱い。いつもベッドから起き上がるまでに時間がかかる。でも、今日は違う。朝の流れがスムーズに進み、学校までの道のりが清々しい。

（大丈夫。今日こそは絶対に話せる）

そう自分を落ち着かせた。

教室へ入るとまだあの子は来ていなかった。

「楓ーおはよう」「おはよう」

「うん、おはようー」

クラスメイトの男子、女子関係なく挨拶してくれた。こんなさりげない会話までもが嬉しい。こんな風にあの子とも話せるのかな。その時、教室の扉が開いた。

すかさず私は、

「おはよう！」

少し焦りすぎた感じもするけれど、今の私は笑顔で話せているはずだ。

「……………おはようございます」

「敬語じゃなくてもいいのに。せっかく同じクラスなんだし、もっと仲良くしたいな」

「私が勝手にしてることだし、楓さんは気にしないで大丈夫です。ありがとうございます」

「え。うん……」

これはどういう意味なんだろうか。私が嫌いだったりする……………それともあの子なりの「いいよ」という意味なんだろうか。朝の清々しい気分とは逆転。怖さからか不安からか、何か言葉で言い表せないほどの喉のつまりを感じた。人と仲良くなるために、こんな気持ちになったのは初めてだ。そんな考えを頭に巡らせていた。私は今日までコミュニケーションで仲良くなれたからこそ、友達関係に

悩むことがなかった。だが、改めて思う。仲良くなるのはとても難しい。そんなことを一日中考えていた。

（明日。明日か……。私はどうすればいいんだろう。もう私には無理かもな）

自分でも、らしくない諦め方だと思ってしまった。けれどもう……。

それから私はすっきりしないまま毎日を送っていた。そんな時、

「楓——！久しぶり！」

この声は、この無邪気で明るい声は、

「幸知！」

「はいっ！珍しいね。そんなに焦って。そんな強く名前呼ばれると思ってなかったよ」

今にも安心感からか涙が出てしまいそうだった。自分でも驚いてしまった。

「あ。ごめん勢いで。何でもない」

「……嘘だ。まーた、一人で溜め込んでる。前にもいったでしょ！いつでも頼ってって」

ほら顔が暗いし、寝不足っぽいし、何か溜め込んでる時や嘘ついてる時の、どこか遠くを見るような癖も出てる」

「幸知……」

私も気付いてなかった、その癖。私のことをよく見てくれてるんだな。耐えられない。気付いたら涙が零れていた。

「え？ごめん！言い過ぎた？」

「いや、違うの！嬉しくて」

そう私が泣きながら否定して答えると、彼女は優しく笑った。

（ほんとに幸知には助けてもらってばかりだな。相談しようかな）

一度大きく息を吸って私は口を開いた。

「幸知。あのね、相談があるんだけど」

「ん？何？」

私はゆっくりそのことを話した。自分の気持ちを上手く伝えられていない部分もあったが、私は話し続けた。

「そうなんだ。そんな子が……。でも私、一

つ思うことがあるんだけど、それからその子と話せてないんだよね？」

「うん。勇気がなくて……」

「そこだよ！そこまで悩んでるなら楓の気持ちを一度はつきり伝えてみればいいんじゃない？その子が楓のことが嫌いだなんてわからないし。まだその子が悪い子だって言い切れないし。というか、言い切りたくない。二人ともまだお互いをよく知らない。だからさ、大丈夫！楓ならきつとまた話せるよ！相手を知ることができれば、きつと仲良くなれるんだから」

そう彼女に背中を押された。

「ありがとう。私やってみる！」

「うん！その調子！」

またいつもの学校。以前幸知にはそういつてもらったものの、まだあの子とは話せずにいた。どうしよう。でも、諦めようと思う気持ち今は一ミリもない。一つの行動が私に

はできなかった。そうして日々が過ぎていく。

そんなある日。その日は雨が降っていた。通り雨らしいが、雨は苦手だ。早く帰ろうと思いい、学校を出ようとしていた。が、明日締め切りの課題を机の中に入れていたのを思い出した。

（やらかした。流石に出さないと……。戻るか）

急いで私は学校に戻った。まだ何人か残っているようだったか、ほとんどはもう帰っていて、いつもと同じ景色。誰かいるのかなと思いい、階段を上がったが、案の定静まり返った廊下に人はいなかった。教室に入ろうとすると、教室の中に一人の女子生徒がいた。

あの子だ。どうしよう。入りにくいなと思うが、話さなきゃ。私の気持ちを。まだ考えていなかったが、深く考えるよりも先に行動に出してしまった。

「あの！私、間違った関わり方してたかな。

あなたのこともっと考えて話すべきだった。ごめん。でも、私は本当にあなたと仲良くになりたい。これは嘘じゃないって本心からいえる」

私は真っ直ぐ彼女を見て言った。

「楓さん。私はあなたに聞きたい。何でそこまで私と仲良くしようとするの。何がそこまであなたを動かすの」

「私はさ、一人保育園からの長い付き合いの親友がいるの。その親友はさ、人のために何かを頑張れる人なの。それでかな。いつからかあの輝きに憧れてた。今まで助けてもらったことは多い。だからこそ私はみんなと仲良くなりたいて思う。私は人が好きだから！さつきも言ったけど本当にあなたと仲良くなりたいって思う気持ちが強かったの」

「……楓さん。こちらこそ今までごめんなさい。今から私が話すこと聞いてくれる？」

「うん！もちろん」

「実は私、お父さんがいないの。それでお母

さんはさ、私のために長い時間働いてくれるから基本、家で私は一人なんだ。かなり前からね。いつからか、そんなことが続いて、人との関わり方がわからなくなってしまうたの。話したくてもうまく言葉にできなかったし、人の気持ちがあつたかわからなくて怖かった」

彼女を見ると、泣いていた。でも、そうだよ。人に伝えるって難しいし、なによりも怖い。それなのにあの子は私に話してくれたんだ。

「ありがとう。言いにくかったよね。それでも私に話してくれて」

「うん……。でもさ、私が友達でいい？」

「何言ってるの。そんな、誰とか関係ないよ。よろしくね！私はあるただからこそ友達になりたいの！いいかな」

「うん。よろしくお願いします」

「だから敬語じゃなくていいよ！もう、ほらもう友達なんだし」

「そうだね。楓」

「あ。呼び捨てだ！やった！一緒に帰ろ！」

「初めてだね。うん。帰ろ」

いつの間にか雨はやんでいた。空は晴れ渡った爽快な夏の空だ。虹も出ていた。

「あ！私忘れ物があつたんだ。ちょっと待って」

「楓。空がすごく綺麗だよ」

「おまたせ。ほんとだ、綺麗！行こう……あかり！」

あつという間に三年の春。入学式の前日。いつもどおり中学校に向かっている。

「楓！おはよう！」

「幸知、おはよう」

「あかり！おはよう！」

幸は前に向かつて声を出した。その後すぐに私は、

「あかり、おはよう」

「幸知、楓、おはよう」

そこから三人で話しながら桜の道を歩いた。仲良くなるには長すぎたかもしれない。でも、今この瞬間が幸せだ。今の私は輝いて見えているのかな。それにしても今日も幸知はまぶしい。

「私、『あかり』って名前好きなんだよね」
私がそういうと幸知は共感した。

「それわかる！私も！」

「え？何で」

不思議そうにあかりは言った。

「だって今のあかりらしい、あかりの人柄ぴったりの名前だもん」

「ね！」

幸知もそう言った。その時、あかりはより一層輝いているように見えた。あかりは目元口元を緩めて笑った。

「……。私もさ、私の名前大好き！」



《優秀賞・一般の部》

随想部門

安心感を伝える存在に

コスモス

「あつ」

私は、電話口で固まった。大学卒業後、食品会社で事務員の方の補助として働いていた。上司から電話での問い合わせ依頼を受けた、ある日の出来事である。対応しようと電話をかけたものの、途中で言葉を話せなくなった。時間が止まった。そういえば、大学時代のアルバイトでも、同じようなことがあった。「ありがとうございます」の、「あ」から先が出てこない。あの時の、逃げ場のない感覚である。

「こんな簡単なことも出来ないなんて」

仕事中にも関わらず、自然と涙がこみ上げてきた。上司には、上手くいかなかったことのみ伝えた。言葉が詰まった事実は、どうしても伝えられなかった。そして、私はこの会社を自主退職した。事務員の方の後継になることを期待されたが、私には荷が重すぎた。電話口で固まってしまった経験が、現在も深く残る心の傷となった。電話も人も怖い。こうして職を転々とし、自信を無くして、自分が働けない現実に悩み続けるのであった。

私は、話し始めに言葉が詰まる、「きつ音」という生きづらさを持っている。私の生きづらさは、いつから始まったのだろうか。保育園の頃、特に言葉の詰まりはなかった。小学校へ入学すると、極度の人見知りを意識した。一学年一クラス、クラスメートが二十名以下であったため、少しずつ友達が出来た。休み時間や放課後に、なわとびや一輪車でよく遊

んだ。友達の家では、当時流行っていた「ポケモン」のゲームをして過ごしていた。また、授業中に自分の考えを発表する、全校生徒の前で作文を読む等、大人しい性格ながら前へ出て行く一面もあった。自発的に何かをすることが楽しく、好きな子どもであった。小学校四年生までは・・・。

小学校五年生のある日、クラスメートの前で発表する授業があった。私の発表後、Aちゃんの手が挙がった。四年間一緒に過ごした仲間で、名前ならもちろん知っている。しかし、彼女の名前が口から出なかった。

突然の出来事に、私の身体は固まった。手を挙げているのは彼女だけなのに、私が進めないため、その場の時間が止まっている。

「どうにかしないと」

その後、どのようにして発表を終えたかまるで覚えていない。ただ残っているのは、ちゃんと出来なかった罪悪感と、周りの人が

普通に出来ることが自分には出来ないという絶望感だけだった。運動は得意ではなかったが、逆上がりも、一輪車も、組体操の倒立も、何度も練習して出来るようになった。努力だけではどうにもならない現実を、思い知った時であった。そして、私は今まで好きだった授業中の発表や音読を避けるようになった。

中学校、高校では人間関係にとっても悩んだが、高校では今までになかったうれしい出来事があった。私は高校の入学時から、自分のクラス内で上手く友達が作れなかった。小学校からの親友と同じ高校だったが、別のクラスのため、朝と昼休み、放課後以外は、ただ過ぎてゆく時間を待つのが苦痛だった。特に移動教室時、一人で廊下を歩くと目立つような気がした。同年の男子数人から、一人ぼっちであることを頻繁にからかわれていた。

そんな中、体育の時間に別のクラスで友達

が出来た。自分のクラスでは一人でも、体育の時間になれば話せる人がある。苦手なはずの体育の時間が、彼女と会えることで待ち遠しく感じた。その日話したい内容を考えるだけで、前の時間からワクワクしていた。ジャージに着替えて彼女のクラスの前で待ち、ガラッとドアが開いて彼女と顔を合わせた瞬間が、一番うれしかったかもしれない。たわいもない会話なのに、誰かと一緒に過ごせることが、日々の安心につながった。諸事情により、彼女は高校二年生になる前に転校してしまったが、彼女と過ごした時間は本当に特別だった。

話は三年遡る。中学校で卓球部へ入部した時に、なぜかいじめられた。同学年の入部者は、私を含め四名だった。他の三名は、私と違う小学校の出身者だった。私のみが経験者で、周りから期待されていた。それが良くなかったのか定かではないが、ある夏の日、

「臭い」

三人からひどい言葉を浴びせられた。彼女たちは、私をからかうように笑っていた。どうにもならない孤独を味わった。一部の先輩からも言われ続け、次第に目立つことを恐れるようにならざるをえなかった。

小学校、中学校、高校と、このようない出来事も経験した。だがしかし、大学へ進学した時、再び転機が訪れる。

それは、偶然だった。大学の入学式前の、オリエンテーションの時間のことである。学科は一年年四クラスに分かれていた。担任の先生が出席をとる。ちょうどその時、後ろのドアから一人の学生が入ってきた。小柄で少しふくよかな彼女は、先生に遅刻を注意された。声はアニメのキャラクターのような高音で、第一印象が私には強烈だった。

その後、彼女と少しずつ話すようになり、彼女が元々声楽を習っていたことを教えてく

れた。

「コーラス部に入らない？」

彼女に誘われた。私は小学生の頃、数年間エレクトーンを習っており、音楽に親しみがあった。歌うのも嫌いではない。戸惑いながら何度も体験をし、入部を決めた。

コーラス部には、個性の強い先輩方が多かった。楽しいことばかりではなかったが、大学一年生の冬、定期演奏会で舞台上上がった時に感じた、身体の内側から溢れてくる高ぶりは、今でもはっきり覚えている。ライトが顔に当たって、少し熱い。客席には、たくさんのお客さんがいらっしやる。友達や知人の顔も見える。緊張で胸は飛び出そうなのに、ずっとこの場に立っていたい。

小学校五年生の時、発表で言葉に詰まってから、人前に立つなど怖くて出来なかったというのに、不思議と不安は感じなかった。他のパートと、音が合わさっていく。その大きな音楽の中に、私も参加していると思うと、

感動で涙が自然と頬を伝った。みんなで努力して、一つのものを作り上げていく過程が、当時の私にとっての大きな喜びであった。あの日、友達になった彼女との出会いが、私の固まった思い込みを和らげるきっかけとなった。

数年後、私はさらに大切なことに気づく。職を転々としていたある日の、カフェでの出来事である。アーモンドトーストとアイスコーヒーを注文したかった。どちらも「あ」から始まる、私にとって詰まりやすい言葉だ。その苦手意識から普段は避けるようにしているが、その日は食欲に突き動かされた。

注文口へ行き、アーモンドトーストの絵を指差し、言葉に詰まりながら「あ」と言う。続いて、アイスコーヒーの欄を指差し、言葉に詰まりながら「あ」と言う。すると、無事注文が通り、おいしく頂くことが出来た。奇跡が起こった。あきらめずに伝えることが大

切だと、体感したのである。閉ざされた扉から、一本の細い光の筋が差すような心地だった。

言葉が詰まることは、不便である。仕事中の報告・連絡・相談や挨拶が上手く出来ない他、自分の名前が言いづらい、電話が極端に苦手等、日常生活での困り事はたくさんある。失敗する度に、自己嫌悪してしまう。周りの人と同じように、もっとスムーズに言いたいことを言えたらいいのに、と思うことは私の日常である。

とは言え、中学校や高校でいじめられていた時、親友はじめ友達はそばにいてくれた。転校した友達からは、メールで励ましてもらった。職場でつらい時も、ありがたいことにたくさんの方々の支えがあった。身体への負担を軽減する作業方法を教えていただき、出来な作業を代わっていただき、体調を気遣っていただき、さりげなく会話の輪に入れ

ていただく等、数えきれない程だ。私は、いつも周りの方々に恵まれていたのである。「ない」ものばかりを数えていたが、もっと「ある」ものに目を向けて感謝していくといいのではないかと閃いた。

現在、私は就労移行支援という福祉サービスを利用している。生きづらさと付き合いながら長く働くため、訓練や実習、就職活動に励んでいる最中だ。これからは言葉が詰まる自分を認め、周りの方々の優しさを素直に受け取りたい。また、「働く」に限らず、自分の経験や知識を活かし、「生きづらさ」があっても人生は楽しめる」という安心感を伝えていきたい。そして、自分のペースで人と関わりながら、お互いの違いを認め、周りの方々と助け合って生きていきたい。これが、私の願いである。

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

随想部門

優しさで広がる世界

白川 遙人

僕の母は、左手足に麻痺がある。母が六歳の頃、心臓の手術をし、術後二日目の夜、突然頭が痛くなり、朝起きると左半身が全く動かなくなっていたそうだ。本当に突然の出来事で、かなり衝撃だったと言っていた。それから、小学校一年生の時は親元を離れ、神戸の病院に一人入院し、リハビリをたくさんしたそうだ。

今は、ゆっくりと歩けるが、左手はほぼ使うことができない状態である。そのため、母は重い荷物を持つ時や瓶のふたを開ける時な

どに、

「はると、手伝って」

と言う。毎日のことなので全部は書き出せないが、他にもたくさんある。そんな時、僕だけでなく、父や妹も自然に手伝っている。

僕が生まれてからの子育ては大変だったと思う。僕は小さい頃からよく動く子だったので、すぐに走ってどこかへ行くし、危ないこともするし、追いかけるのも捕まえるのも本当に大変だったと言っていた。でも、そんな僕たちを嫌な顔一つせず育ててくれたことにとても感謝している。

また、母は毎日、家事だけでなく仕事もしている。在宅で、パソコンを使って一般事務の仕事をしている。車も運転する。僕が小学生の時、習い事の送迎はほとんど母がしていた。こんなふうに片手だけで全てをこなしてしまう母を、僕は尊敬している。

僕が母の話の中で一番心に残っているのは、母が子どもの頃、スポーツやマラソン大

会、運動会などで皆と同じようにすることができず、嫌いだったということだ。マラソン大会では、全員がゴールして座っている中、最後の一周を一人で走らなければならなかったことが悲しかったそうだ。母は、

「でも今は、はるとが楽しそうにするから、はるとのお陰でスポーツも運動会もマラソン大会も好きになった」

と言ってくれた。

僕は体を動かすことが好きなので、母の気持ちに本当の意味で理解することはできない。でも、もし誰でもできるのに自分にはできない、ということがあれば、きつと悲しい気持ちになるだろう。だから、そんな母が僕を見てスポーツを好きになれたのは嬉しかった。母の話を聞いてからは、いつも他のお母さんたちと応援に来てくれることが、もつと嬉しくなった。

僕は母と接する中で、障がいのある人々の中には、僕が当たり前のようにできることが

できない人もいる、ということを知った。そして、時には悲しい気持ちや不便な思いをしていることも分かった。だから僕は、障がいのある人たちの気持ちを考えて、寄り添える人になりたい。でも一方で、特別扱いをせず皆と同じように接したいとも思う。なぜなら僕には、母のことを特別扱いしているつもりはないからだ。

僕の友だちも周りの人も、母の障がいのことを、悪く言ったり面白がったりしているのを一度も見ることがないし、必要なときは自然と手助けしてくれる。母も、

「それはすごいことだし、本当に皆に感謝やな」

と言っていた。

社会には、障がいのある人への差別や偏見がいまだに存在する。そんなことを見聞きするたびに、この世界も僕の友だちのような人でいっぱいになればいいのに、と思う。

母のような人が快く生活できる優しい世界

に、少しでも近づいてほしい。そのために僕は、今日も母の買ってきた重たい買い物袋を運ぼうと思う。

そして、障害のあるなしにかかわらず、困っている人がいたら手助けできる自分でいたいと思う。こんな温かくて優しい気持ちで、多くの人に広がるといいな。



《優秀賞・一般の部》

詩 部 門

「ひかりのような声でした」

ひの 朱寝

一日のはじまりに人の死を知りました

その人が自ら選んだ、死でした

テレビでよく見る、だいすきな人でした

いつ、なぜ、どのように、どの場所で

死んでしまったのか

おそらく、きつと

勝手にみんなに知らされました

ニュースから目が離せないわたし

メディアも、何もかもが勝手だと思いました

いつも通りのバス停で

その日はまぶしいくらい

良いお天気で

けれどとてもとてもかなしくて

今になってようやく気がついてのです

ああ、わたし、知っている人の死にしか

気がつけないのだ、と

何人も、何人も、気がつけない誰かが今も

きつと「選んで」いるはずでしょう

こんな明るい朝など来ない人もいるでしょう

そんなすべての人を救えたらいいのにと

おもうことしかできなくて、できなくて

バスを待つ、わたしのとなりからそつと

「良い天気だねえ」

それはひかりのようなこえでした

かなしみをすべては救えない

けれど人に寄り添い、照らし、あたためる

「ことば」を人は持っている

あなたも、わたしも、誰しもがきつと

そうして止められる死があるのならと

「そうですね、とてもすてきな朝ですね」



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

詩 部門

大切な人たち

北口 緋希

あつ、やってしまった

わたしのいちばんいいセリフだったのに
あれだけ練習したのに間違えてしまった

頭が真っ白

本番も間違えてしまうかもしれない

友達や先生が励ましてくれていているけど

気持ちが切り替えられない

あの日から発表というものが怖くなった
わたしが言ったことは間違っているかもしれない

これで合っているのかな

こんなこと言ってもいいのかな

発表の時間があるたびに心の中で悩んでいた
誰にも言えないわたしの気持ち

ある日突然、今日やらなと思った

友達や先生がわたしを励ましてくれたり

発表ができないわたしを待ってくれたりした
ことが思い浮かんだ

わたしには応援してくれている人がいる

ちゃんとしゃべれるようになりやって言わ

ずに

見守ってくれているママがいる

そう思って臨んだ発表

すごくどきどきしたけど言えた！！

わたしの気持ちが言えた！！

勇気を出して発表したあの日から
どんどんできることが増えた
司会もした 代表あいさつもした

応援してくれる人がいるってことが再確認
できて本当によかった

みんなありがとう

みんながいればこれからも頑張れる

だから今度はわたしが応援するね



《優秀賞・一般の部》

創作童話部門

お母さんといっしょだから

鯖 喰太郎

マイは、半年ほど前に生まれた猫の女の子です。きなことのような色の茶トラの猫です。

ある日、お母さんといっしょにダンボール箱に入れられ、すてられたのです。マイをすてた人は、公園の大きなプラタナスの木陰にダンボールをおくと、さあーと車で走りさりました。梅雨の雨がシトシトとふっていました。

大きなプラタナスの木の下は、なんとか雨はしのげたのですが、知らないところへ連れて来られて、まっ暗でとても不安でした。お

母さんにくっついて、雨の止むのを待っていました。夜が明けるころになるとだんだんとお腹がすいてきました。

「お母さん、お腹がすたよ」

マイもお母さんも昨日からなにも食べていません。お母さんは、マイにお乳を飲ませようとしたが、お母さんもお腹がペコペコでお乳を飲ませることができません。

「雨が止んだら、なにか食べ物さがしてくるわね。それまでもう少しがまんしてね」

お母さんはそういって、マイの体をやさしくなめていましたが、やがてお母さんは動かなくなつて、身体が冷たくなっていました。

「お母さん！」

マイは、どうしていいかわからず、ニャーニャーと鳴いていました。

そうしていると、ようやく雨があがりまし

た。
「お母さん、わたしがなにか食べ物さがしてくるわね」

マイは、ダンボールから飛び出して、食べ物さがしはじめました。

まずは公園のまわりを歩いてみて、くんと鼻で食べ物のにおいをさがしました。けれども、まったく食べ物のにおいはしません。マイは、少しずつ公園からはなれていき、食べ物のおいのするお家はないかと歩きました。

そのときです、急に大きな犬の鳴き声が聞こえました。

「ワォーン！　ワォーン！」

「犬だわ！　怖いわ！」

マイは、はんしゃてきに近くのお家になげこみました。

大きな犬は、雨があがって散歩に連れてきてもらっている飼い犬なのでリードはつけていますが、飼い主さんが注意してもワンワンとほえつづけます。マイはにげこんだお家の植木鉢のかげにかくれましたが、お腹がペコペコなうえに少し歩いていたので、きょうふ

から、震えがとまらなくなりました。

犬の鳴き声を聞いて、にげこんだお家の人が出てきました。お家の人が出てくると、犬は鳴くのをやめて、飼い主に連れられて去っていきました。

「もうだいじょうぶだわ」

そう思ったしゅんかん、身体のちからがぬけてしまつて、まったく動けなくなりました。気がついたら、にげこんだお家のおばさんに抱きかかえられていました。

またわたしはダンボールにいれられるの？　といっしゅん思いましたが、にげこんだお家のおばさんは、そのままお家の中に連れて行つてくれて、毛布の上につつみこむように寝かせてくれました。

「もう、だいじょうぶですよ」

おばさんは、そういつて、小さなお皿にミルクを入れてくれました。

その日から、マイはにげこんだお家で飼つてもらふことになったのです。このお家に

は、子どもはいなくて、おばさんといれあのおじさんとの二人暮らしでした。

おばさんもおじさんもやさしくて、おいしいごはんやフカフカの猫用ベッドやピンク色のかわいい首輪も買ってくれました。トイレもちゃんと用意してくれ、コロコロと転がるボールも買ってくれました。

マイという名前をつけてくれたのは、おじさんのほうです。迷子の猫だから、マイだそうです。おばさんもおじさんも、「マイちゃん、マイちゃん」と呼んでくれて、とても可愛がってくれました。このおばさんとおじさんのお家にいたら、もうダンボールに入られてすてられることはないように思えて、幸せな気持ちになりました。

でも、お家のベランダに出してもらって外を見ると、お母さんのことを思い出してしまいます。お母さんが恋しくてたまらなくなり、マイはベランダから飛び出し、ダンボールに入れられてすてられた公園を目指して走

り出してしまいました。

マイは、お母さんの死は理解はできていました。このお家に来て三日目に、おばさんとおじさんが、公園にすてられたダンボールの中で猫が死んでいたらしい、と、話していたからです。すぐにお母さんだと思いました。でも、公園のプラタナスの木の下に行けば、お母さんに会えるように思えたのです。

でも、そこにはダンボールなどではなく、お母さんもいません。マイは、大きな声で「お母さん！」と呼んでみたのですが、公園の大きなプラタナスの木は黄緑色の葉っぱを広げているだけなのです。

その時、おじさんの「マイちゃん！」と呼ぶ声が聞こえました。ベランダからにげだしたのをさがしにきてくれたのです。

「マイちゃんは、ここですてられたのだね。でも、もううちの子だから、おばさんもおじさんもマイちゃんをすてたりはしないから、安心していんだよ」

おじさんは、そういいました。

「ありがとうございます」

マイも、もうこのお家のおばさんとおじさんには心を許しています。

「じゃあ、お家に帰ろうか。ベランダから飛び出したりしちゃあ、あぶないよ」

おじさんは、やさしくマイの頭をなでました。

「でも、お母さんに会いたくなつて。ベランダからこの公園のプラタナスの木が見えたんです」

お家のベランダからは、公園の大きなプラタナスの木の先端が見えるのです。

「でも、マイちゃんのお母さんは…」

「もう死んでしまったことはわかってるの。でも私たちがすてられたこの木を見たら、たまらなく会いたくなつて」

マイはうつむいて、黙りこんでしまいました。

「お母さんは、ここにいるよ」

おじさんはニコニコしてそういいました。

マイは周りを見回しましたが、おじさんと自分のほかにはだれもいません。

「ここ。そう、こつちにも。マイちゃんの体の半分はお母さんなんだよ」

と、おじさんはいつて、マイの背中をなめました。

「マイちゃんの耳の半分はお母さんでできている。だから、マイちゃんが鳥の声を聞いているときは、お母さんもしょに聞いているんだ。そして、マイちゃんの目の半分はお母さんでできている。マイちゃんが空を見ている時はお母さんもしょに見えているんだよ」

マイの焦げ茶色の大きな瞳が輝きました。

「マイちゃんの心の半分も、お母さんでできている。だから、マイちゃんが幸せなら、お母さんも…」

「私が幸せなら、お母さんも幸せなんだってことなのね」

「そうだよ」

「わたし、いま、とても幸せかも…」

おじさんは何度も何度もマイの頭をやさしくなでました。

マイは、大きな犬にほえられてこわかったとき、もしかしたらお母さんが「このお家ににげこみなさい」って教えてくれたのかもしれない、と、思いました。

「じゃあ、お家に帰ろうか。おばさんが待っているよ」

「はい！」

そういうとマイは公園からお家に向けて走り出しました。おじさんはおいてきぼりです。

「おいおい、先に行くのかい？ 気をつけなきゃあ、あぶないよ」

おじさんは、マイを追いかけてました。

「だいじょうぶ！ お母さんといっしょだから！」



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

創作童話部門

優の挑戦

らいおん ねこ

ある小さな町に一人の少女がいました。名前は優。優は名前の通り心優しい性格をしていましたが、生まれつき足が不自由で車椅子生活を送っていました。そのため学校などはいつも車で登校していました。優は車の外で友達と楽しそうに登校している同学年くらいの子を眺めながらいつか自分もあんなふうになれたらなんて願っていました。

しかしその願いは叶いませんでした。優の足は治らないと医師に告げられたのです。最初はこの事実を受け止められませんでした。

時間経つにつれて告げられたことの意味を段々と理解していきました。友達と登校することは愚か、もう自分の足で歩くことさえ叶わないと。優は唯一毎日楽しく行っていた学校にも行かず引きこもりがちになってしまいました。

ある日、そんな優を見かねた優のお母さんは近所の公園に連れていってくれました。

「もしかして優ちゃん？」

後ろから声がしました。

「よかつたら一緒に遊ぼうよ！」

振り返るとそこにはクラスメイトの心美がいました。心美は明るくて元氣な性格で、優とは同じクラスになってことがないので喋ったことはありませんでしたが、直ぐに打ち解けて仲よくなりました。2人はおしゃべりをしたり、色々な遊びをして遊びました。時間を忘れるくらい楽しい時間でした。2人が遊んでいると5時のチャイムが鳴り響きました。「じゃあそろそろ帰るね！また明日学校で。」

心美は優にそう言い帰っていききました。優はともうれしくなりました。だってまた明日学校で待つてくれる友達が自分にもできたのですから。

優が学校に登校するようになってから数日。優はクラスメイトからボランティア活動の話を聞きました。町の図書館が改装工事するため、本を全て外に出す必要があるようです。それをボランティアが手伝うことになっているそうです。優は（自分も何か人の役に立ってみたい！）そう思いましたが、車椅子がないと生活ができないため自分にはできることがないと諦めていました。

しかし心美は優がボランティア活動をやりたがっていることに気がつきました。そんな優に心美はいいました。

「今度のボランティア活動一緒にやらない？」

優はしばらく考えこんでいましたが、私にはきつとできないと言ひ、断りました。

「一人ではできなくても二人ならできるかもしれないよ！やりたかったんじゃないの？」心美が言いました。その言葉にハツとして勇気づけられた優は二人で図書館の改装工事の準備を手伝うことにしました。

まず二人は図書館の職員の方に参加者が少なく人手が足りていないと聞いたので参加者を集めることにしました。町の人や学校の友達など沢山のの人に声をかけましたが、やはりめんどくさいことはやりたくない様子。あまり人は集まりません。そこで絵を描くのが上手な優はポスターをつくりました。優のポスターは面白おかしなデザインで町の人の間で、瞬く間に広まっていきました。そのおかげか参加者は少しずつではありますが、段々と増えていきました。そして改装工事の準備の日になりました。優は車椅子から降りてみんなと同じようにすることはできませんでしたが、指示を聞きながら人一倍、いや一人十倍努力して頑張りました。そして心美もそん

な優のことを全力でフォローし、2人は本気で改装工事の準備に取り組みました。

図書館の改装工事は2人のおかげでずっと早くに終わりました。図書館の職員の皆さんはありがとう、ありがとうと口々に言ってくれました。しかも優と心美は表彰状まで頂いてしまいました。図書館の職員の方を見ていてくれたのです。優と心美がポスターなどを作って参加者を集めてくれたこと、改装工事には誰よりも真剣に全力で取り組んでいたことを。優は自分でも人の役に立っていたのかなと思うと嬉しくて嬉しくて仕方ありませんでした。心美も友情の力を信じ、優を支えられたことに誇りを感じました。この経験から二人の絆はぐっと深まり、どんな困難も乗り越える力を手に入れることが出来るのです。



令和5年度 人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発行 令和5年12月
編集 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号
兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355

FAX 078 (242) 5360

発行者 兵庫県 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

印刷 (株)興正社

